第三章　弥生時代

第一節　はじめに

弥生時代は、それ以前の縄文時代における狩猟・漁撈・採集経済社会から、稲作農耕の普及によって人々が定住するようになり、村が形成され、鉄・青銅器などの金属器も導入されて、原始国家への第一歩を踏み出した時代である。[1]

「弥生時代」はいうまでもなく、「弥生（式）土器」が使用された時代ということで呼称されている。弥生時代は縄文時代に比べて期間が短く、紀元前二〇〇年から前方後円墳の出現する紀元後三〇〇年までのおよそ五〇〇年間であるが、米を主食とする食生活や開発された農具は、一七〇〇年経た現在でもほとんど変るところがない。

弥生土器の研究は、明治時代にはじまる。明治一七年に東京都本郷弥生町の向ヶ丘貝塚で、有坂鉛蔵氏が一個の縄文土器とは異質な土器を発見した。この種の土器は、すでに江戸時代の記録にもみられるため、人々の目に触れた最初の発見というわけではない。しかしこの弥生町で発見された土器が有名なのは、学会においてこの土

器が、それまで知られていた縄文土器とは形・性質ともに異なる特徴を有している最初の資料として提議され、各地において弥生式土器が発見される契機になったからである。

この土器に対する名称は、蒔田鎗次郎氏の「弥生式土器」[2]、須藤求馬氏の「有紋素焼土器」[3]、大野雲外氏の「埴瓮土器」[4]、八木奘三郎氏の「中間土器」[5]などさまざまな名称が提唱されたが、結局は発見地にちなみ、また蒔田鎗次郎氏によってこの土器が日常使用された食器であると概念づけられた「弥生式土器」の名称が定着し、現在に至っている。

弥生町で弥生式土器が発見されて後、同種の土器の発見が全国各地からも報告されたが、まだこの土器の文化がどういう文化であるかについてはわかっていなかった。

大正一四年山内清男氏が、宮城県桝形囲貝塚から出土した土器に籾圧痕があることを報告した。[6]

昭和一一年から発掘された奈良県唐古遺跡[7]や、昭和二二年から発掘された静岡県登呂遺跡[8]からは、水田址が検出され、多量の弥生式土器と共に鋤、鍬などの木製品が出土し、それまで森本六爾氏が提唱してきた原始農業文化[9]を実証した。

昭和一四年、東京考古学会による『弥生式土器聚成図録』によって全国に分布する弥生式土器の編年がなされ、各地における研究は一層躍進した。

弥生文化は、九州から東へと波及したが、前期の土器に総称される遠賀川式土器[10]は、伊勢湾どまりまでであって、東日本においては弥生式土器といっても縄文土器と見分けのつかないもので、後期の段階になってようやく器種ともに西日本と様相が似てくるなど、まだまだ縄文文化の伝統が根強く残っていた。稲が搬入されても気候・風土の違いから、全国的に農耕文化一色になったわけではなかった。

但馬においても、海岸線沿いに遠賀川式土器が波及し、弥生文化が展開されるが、中期以降山陰文化、瀬戸内文化、畿内文化の影響をどのように受け入れていったのかを、次の節で遺跡から出土する遺物よりみていきたいと思う。

第二節　弥生土器の時期区分と地域性

弥生時代は、土器の形態（様式）からおおまかに前期・中期・後期に分けることができ、各時期区分のなかでそれぞれの地域文化の様相をみることができる。

弥生土器の器種は主として、壺（貯蔵用）、甕（煮炊き用）、鉢・高坏（盛り付け用）があり、それぞれの目的に従って使用された。中期以降になり、土器の用途が多様化するにつれて、水差、長頸壺、無頸壺、器台などもつくられるようになる。

前期

前期の土器は一般に「遠賀川式土器」、あるいは「立屋敷式土器」と総称されている。土器の表面を篦磨きし、篦による羽状文・重弧文・鋸歯文・平行沈線文・木葉文などや、貝殻の縁を押えてつけて貝殻腹縁文などの文様を施している。黒色に仕上げた壺の表面に赤い彩文を施したり、土器の頸部や胴部に段をつくったり、凸帯を貼り付けたりしている。

福岡県板付遺跡の発掘によって、それ以前から知られていた遠賀川式土器より古い土器が確認された。これが弥生土器最古の土器―板付Ⅰ式土器⑪であり、縄文晩期の夜臼式土器⑫と共伴していた。丹後半島や伊勢湾沿岸にはこの板付Ⅰ式土器ではなく、それよりは新しい板付Ⅱ式土器⑬が波及していく。

第2表　西日本における弥生式土器編年表

	300 B.C. 前期	100 B.C. 中期	100 A.D. 後期	300 A.D.
九州	下伊田 立屋敷 板付	須玖 城ノ越	西新 下大隈 伊佐座	
四国	阿方 入田	中寺 土居窪	原 大空	
瀬戸内西	中山Ⅱ 中山Ⅰ	塩町 中山Ⅳ 中山Ⅲ	上深川Ⅱ 上深川Ⅰ	
瀬戸内東	門田 津島下層	菰池 新邸 高田	白江Ⅱ 津島上層 上東 白江Ⅰ	
山陰	上野Ⅱ 原山	知井宮Ⅰ 上野Ⅲ	九重 知井宮Ⅱ	
畿内	第一様式(新) 第一様式(中) 第一様式(古)	第四様式 第三様式 第二様式	第五様式	
但馬	宮内黒田遺跡(出石町)	祢布ヶ森東遺跡 ササ遺跡(養父町)	南八代田遺跡 女代神社遺跡(豊岡市)	

(『日本の考古学』Ⅲ編年参照、一九六五年)

畿内地方では、奈良県唐古遺跡の調査によって確立された畿内第五様式編年の第一様式を前期にあてている。第一様式はさらに古・中・新の三段階に分けられている。すなわち、古段階は甕や壺の頸部、胴部に段をつくり出すもので、中段階は突帯を削り出してつくり、篦描の沈線をめぐらすものである。新段階は突帯を貼り付けるようになるとともに、篦描沈線を数条めぐらすものである。

但馬においては、出石町の宮内黒田遺跡が前期の土器を出土することで知られているが、古いものはなく、一様式新段階のものからみられる。

中期

前期の土器がどの地域においても、器形が均一化していて、見分けがつきにくいほどであるのに比べて、中期になると、各地域ごとに土器の形に変化がみられ、種類も増加するほか、土器面の装飾も豊かになる。

弥生文化を東にもたらした九州地方では、前期にみられた貝殻腹縁文や篦描文はほとんど施文されなくなり、無文化する傾向にある。しかし、須玖式土器⑭に代表されるような、赤色に研磨された優美な土器がつくられ、種々の土器が大型化していく。特に北部九州の特色でもある埋葬に使われた甕棺は、中期になると、高さが一メートルにも達する大型のものが製作されるようになる。

近畿地方では、畿内第五様式編年において、二様式・三様式・四様式が中期にあてられている。この時期には櫛描文が盛行し、直線文・波状文・流水文・簾状文などのさまざまな文様を組み合わせて、土器面に施している。

二様式の土器はまだ櫛描は粗雑であるが、三様式になると回転台を使用して、規則正しく櫛描文が施される。三様式の後半近くになると凹線文がつけられるようになり、四様式になると凹線文が土器の文様の主流を占める

ようになるとともに、一部の土器には叩き手法を取り入れて製作したものもみられるようになる。

さらに細かく目を転じてみると、畿内のなかでも大和、河内・摂津・播磨・紀伊・近江など、それぞれの地域で文様などに特色のある土器が製作されている。

この時期には、前期においては急速に伊勢湾沿岸まで波及したにもかかわらず、しばらく足踏みをしていた遠賀川式土器が、ようやく中部・関東地方へ東進を再開する。そして中期後半になると東日本でも櫛描文の手法を取り入れた土器が製作されるようになる。

但馬では、中期の一括した土器を出土した遺跡としては、養父町餅耕地のササ遺跡が知られている。

後期

一般にどの地域も、土器の実用性が強調されて、装飾としての文様が少なくなり、簡素な同器形のものが多量に製作される。

山陰や北陸地方では凹線文にかわって疑凹線文が普及し、土器の内面をヘラ削りするのが一般的になる。

畿内では第五様式を後期にあてている。土器は小形化し、叩目技法が一般化する。小形鉢や長頸壺、手焙形土器がこの時期に新しく製作されるようになるが、全般に装飾性は乏しくなる。

弥生時代に続く古墳時代の土器は、土師器[15]と呼ばれている。土師器は弥生土器の様式を受け継いだものであり、またその変化が極めてゆるやかであったらしい。したがって弥生終末期の土器と古墳前期の土器との間は、縄文土器と弥生土器との間にみられたような明確な境界はみられない。土師器になると弥生土器にみられたような地域性はなくなり、均一化したものになる。畿内では、小形丸底壺を含む布留式土器[16]や、それ以前と考えられる庄内式土器[17]が古式土師器として認識されている。

しかし、ある一方では庄内式土器を畿内第六様式として弥生土器にする考え方もあり、厳密に弥生土器と土師器を区別することはむずかしい。

以下、各遺跡の土器を述べるにあたって、古式土師器も一応一括して触れたいと思う。

第三節　町内の遺跡

(1) 祢布ケ森東遺跡

祢布ケ森東遺跡は、国鉄山陰本線江原駅の北西約五〇〇メートルの所に位置する。

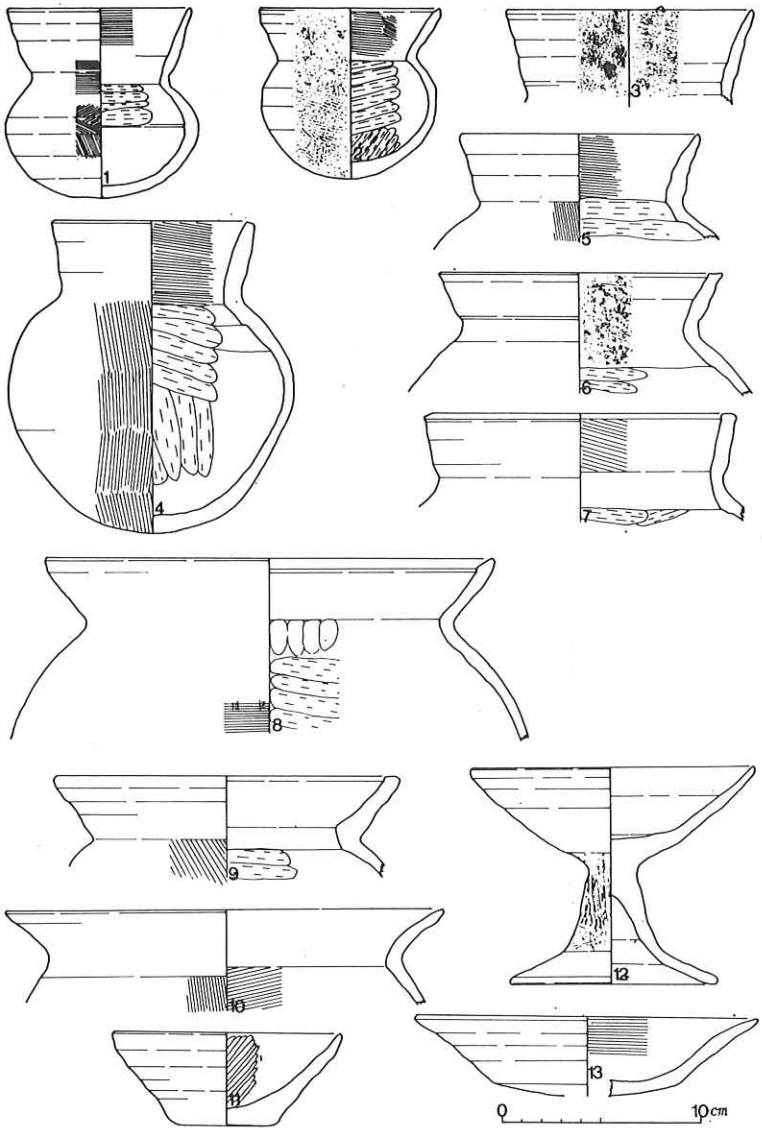
昭和二六年八月に焼ケ辻遺跡に近接した蚕業試験場で、土師器片を採集されたことが、遺跡確認の発端となった。同年九月に試掘調査が行われ、翌昭和二七年七月から八月にかけて、発掘調査が実施された。その結果、出土遺物は土師器を主体とし、石器・木製品などを出土する遺跡であることが確認され、小字名をとって祢布ケ森遺跡と命名された。[18]

その後、日高町総合庁舎建設が遺跡付近に計画されたため、遺跡の範囲を確認する試掘調査が、昭和四八年七月、日高町教育委員会の手によって行われた。

なお、この遺跡より北西約三〇〇メートルの所で、昭和四九年に日高バイパス建設計画のための事前調査で、土師器・須恵器類のほかにも弥生土器も出土し、別の遺跡が存在することが確認された。そのため新しく発見された方を「祢布ケ森西遺跡」とし、以前から知られていた遺跡を「祢布ケ森東遺跡」と呼び分けることにした。

昭和二六年・二七年の調査

遺構　トレンチ調査が行なわれたが、遺構らしきものは検出されなかった。土層の堆積状況は、①表土、②黒褐



第46図　祢布ケ森東遺跡出土土器（昭和26・27年調査）

色粘土層、③混砂礫粘土層、④褐色砂礫層、⑤砂礫粘土層、⑥有機質泥土層、⑦有機質粘土層、⑧砂層、⑨砂礫層の順になっている。遺物は、第二層の黒褐色粘土層から須恵器片が若干と、第三層の混砂礫粘土層と第六層の有機質泥土層より、土師器が多数出土し、この第六層内からは木器も多数出土している。

遺物　第46図に示したものがその当時出土した土器である。

1・2は小形坩で暗褐色を呈す。外面はハケで調整し、胴部内面はヘラ削りを行なっている。器壁はこの種のものとしては、やや厚手で作りは粗雑である。3～7は壺でやや直上する口縁を有し、外面は粗いハケ調整、胴部内面はヘラ削りを行なっている。6・7は直上する口縁の端部が肥厚したまま平坦な面を作っている。粘土紐の痕跡が内面にみられる。8～10は甕で、8は口縁をやや内湾させて端部内側を肥厚させている。外面ハケ調整、内面ヘラ削りを行なっているが、頸部内面に指頭圧痕がみられる。10は胴部内面に粗いハケがみられる。11は平底の鉢で、口径一一・七センチ、底部五・二センチ、器高四・八センチである。内面はヘラで磨いている。12・13は高坏で、坏部はやや丸味を帯び、明瞭な稜を作らない。

以上の土器は古式土師器で、広義の布留式土器の範疇にはいるものである。

この他にも、弥生土器の底部や蓋など若干出土している。

出土遺物は、図示した土器のほかに火鑽臼[19]などの珍しい木製品や管玉、土錘などが出土している。

昭和四八年の調査

東西二二〇メートル、南北一七〇メートルの範囲でトレンチ調査を実施した（第47図参照）。

遺構　1トレンチからは、径約二〇～三〇センチの整然と並んだ掘立柱列が検出された。整地がなされており、おそらくは隣接する但馬国分寺に関連する遺構と思われる。

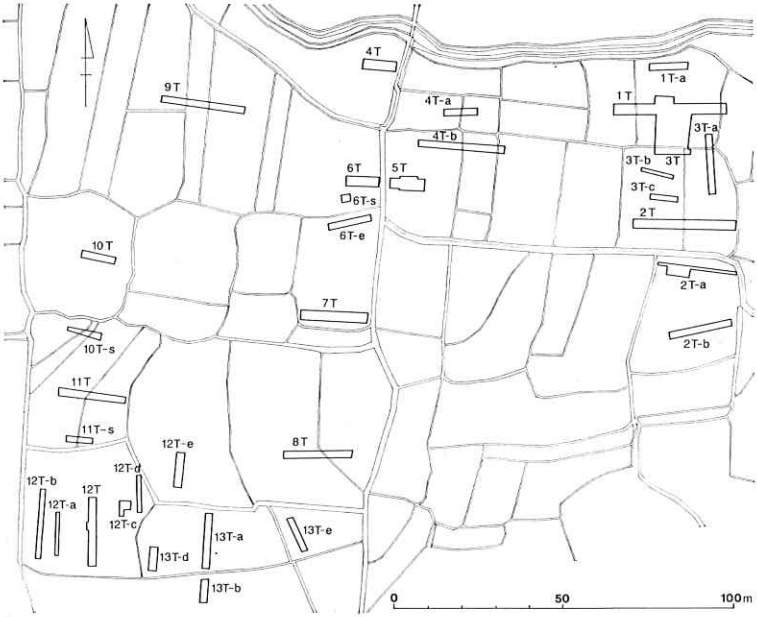
2トレンチからは、表土下五〇センチのところで、径一〇センチ程度の柱穴が見られたほか、表土下七〇センチのところで、幅約三メートル、深さ五〇センチほどの浅い溜り状の落ち込みが見られた。

5トレンチでは、表土下六〇センチのところで、南北に走り、幅約一・五メートルの間隔を有する二列の矢板列が検出されている。矢板は幅二〇～三〇センチ、長さ三～四メートルの板を横にして、ほぼ一メートル間隔で長さ六〇センチほどの板が押えとして打ち込まれていた。

6トレンチでは、トレンチの西側で浅い溝が検出された。

11トレンチからは、表土下一・二メートルのところで、5トレンチでみられたような矢板列が南北にわたって検出された。

12トレンチでは、幅約二～三メートル、深さ約一メートルの溝が検出され、多量の土器が出



第47図　祢布ケ森東遺跡トレンチ配置図

土した。この溝の流れの方向を追求するために、12a～eまでのトレンチを12トレチの東側と西側に設定して調査したところ、ほぼ東西に流れる溝で、12トレンチeでは消滅することが明らかにされた。

13トレンチでは遺構は検出されていないが、他のトレンチではほとんど出土しなかった縄文式土器がかなり出土した。

遺構は検出されなかったが、その他のトレンチからも土器は出土している。

土層の堆積状況は、どのトレンチにおいても表土下一メートル程度のところで、砂・砂礫層がみられ、昭和二七年に調査された地点同様、低湿地で河川が氾濫して、土砂が堆積し、土器も一緒に流されてきて埋没したものと考えられる。調査された範囲内においては、地形的にみても住居址が検出される可能性はないと思われる。

遺物　縄文土器から須恵器までの各種の土器が出土している。そのなかでも、後期の弥生土器が主流をなし、特に甕形土器の占める割合が大きい。以下、12トレンチ出土の土器を中心に、形態分類を行なうと共に、時期についても考慮してみたい。

12トレンチ出土の土器（第48図～第57図）

第48図～第54図は12トレンチ溝内出土のみの土器である。

甕形土器（第48図～第51図、第55図～第56図）

甕形土器は口縁部の形態より、甕A～甕Eに分けることが出来る。

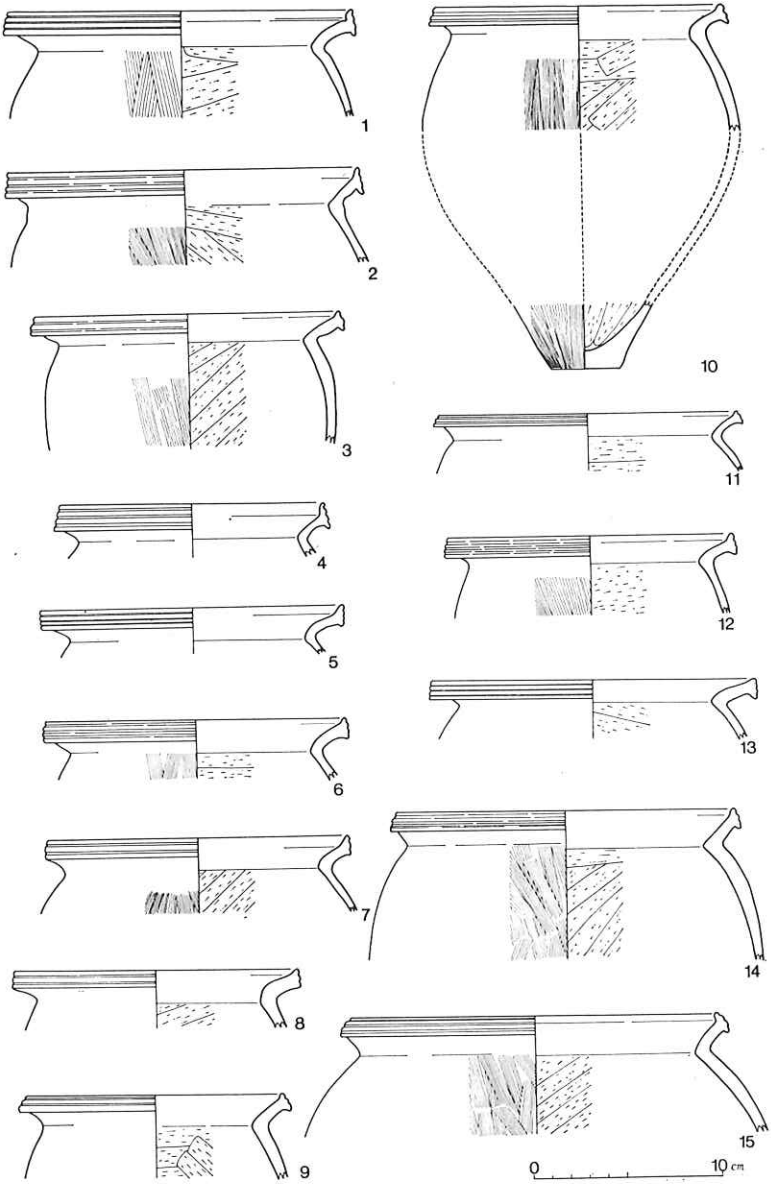
甕A　口縁部がくの字状に屈折して、短い口端面をもつもので、数量は少ない。第48図1は口縁部の屈折が大きく、口端内面をつまみ上げている。外面はハケ目、内面は胴部下半部は縦、上部は横方向のヘラ削りがみられる。口唇部に刻み目を入れるもの、胴下半部外面をヘラ磨きするものもある。

甕B　口縁部が受け口状で、明瞭な稜を作り、凹線文を持たないものである。第49図25・26は、口縁内外面を横ナデし、胴部は外面ハケ目、内面は横方向のヘラ削りがみられる。第50図34・第51図43は、肥厚させた口縁部をややつまみ上げて、ゆるやかな段を作っており、他のものとは口縁部の形態はやや異なるものであるが、甕Bの中に入れておく。43は口縁内外面は横ナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りと中程にハケ目が認められる。肩部には叩きの痕跡が一部にみられる。底部は突出ぎみの小さな平底である。

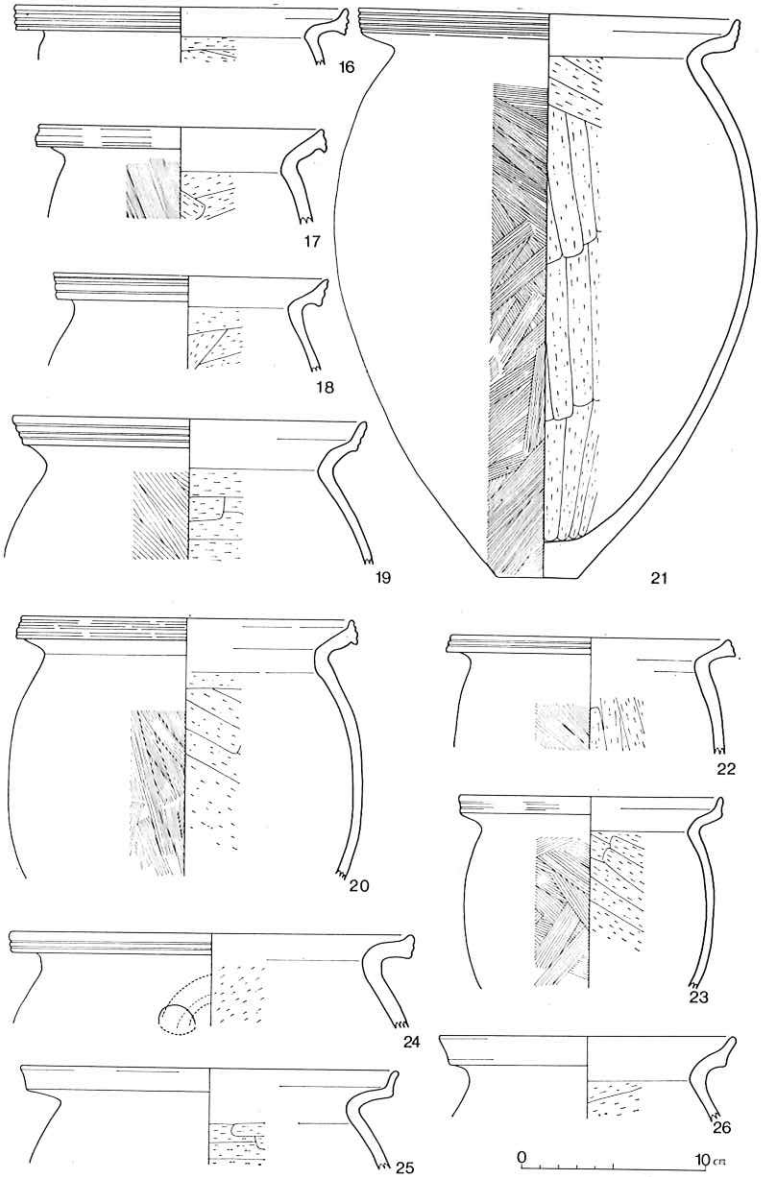
甕C　くの字状に屈折した口縁部が段をもたずに、丸くおさまるもので、胴の張りが大きい。第49図22は、やや直立ぎみの肥厚した口縁部を有し、胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りがみられる。底部は丸底に近い小さな平底である。

甕D　くの字状に外反し、肥厚した口縁の上下をつまみ上げて口端面を作り出した、いわゆる「くりあげ口縁」のやや内傾ぎみの端面に、二〜四条の凹線文を施したものである。出土した甕の中でこの種の口縁を有するものが最も多い。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りがみられるが、第49図20・22のように、肩部を横ナデしてハケ目を消しているものもある。器壁は薄いものと厚いもの、さまざまである。肩は張り、胴部最大径は、ほぼ三分の二の高さのところにある。底部は安定した平底である。第50図27や第55図3のように、肩部に把手をつけるものがある。第55図9は、口縁端面にヘラで三条の沈線をめぐらしており、胴部最大径は口径よりも小さい甕である。

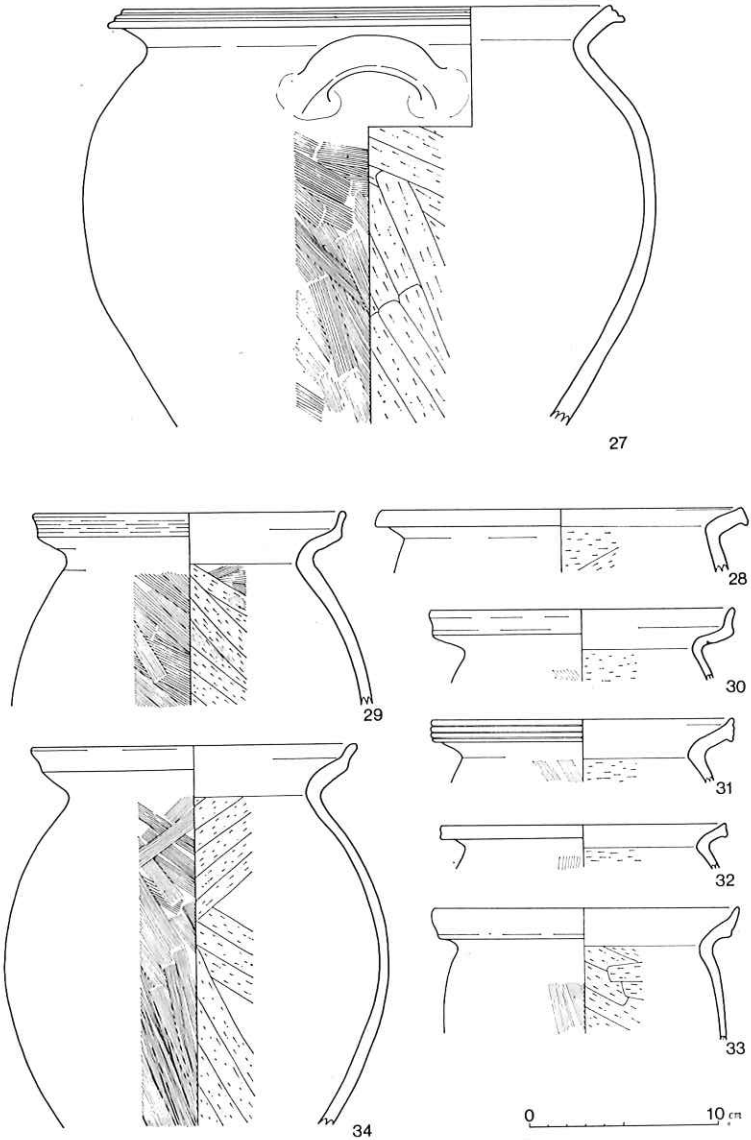
甕E　甕Bにみられる受け口状の口縁部の端面に二〜四条の凹線文を施したものである。第49図21は、口端面には四条の凹線文、胴部外面にはハケ目、内面はヘラ削りがみられる。頸部から肩部にかけて、横ナデでハケ目を消している。肩はあまり張らない縦長の甕である。



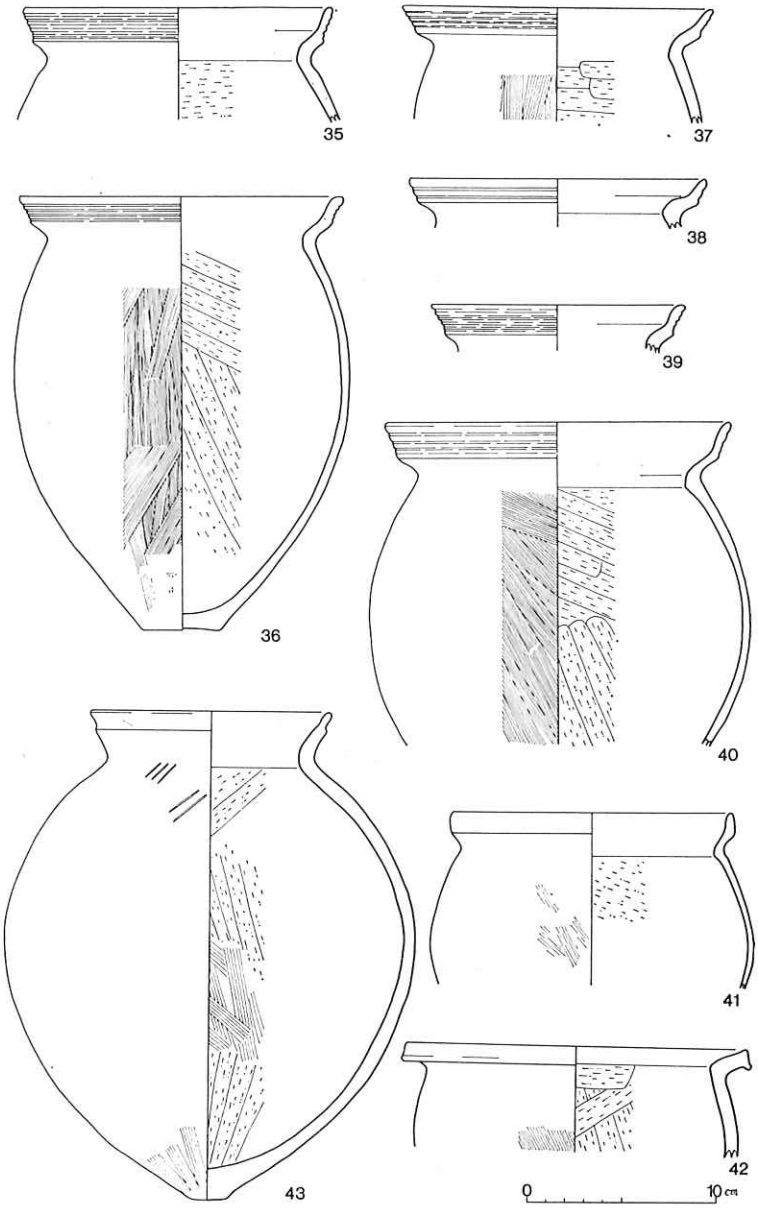
第48図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ溝出土土器(1)



第49図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ溝出土土器(2)



第50図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ溝出土土器(3)



第51図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ溝出土土器(4)

甕F　甕Eの口縁の屈折をゆるやかにして、口端面に疑凹線文を施すものである。口縁部の稜は山陰や北陸地方で見られるような明瞭なものはなく、端面も幅二センチ程度のもので、幅の広いものはない。器壁は概して薄く、底部は第51図36にみられるようなあげ底状の平底を有す。肩はほとんど張らない。

甕形土器は、凹線文を基調とし、内面をヘラ削りするなど、山陰特有の技法でつくられている。第55図1は中期末葉、第48図10や第50図27に代表される甕Dや、第49図21などの甕Eは後期中葉から後期後葉、第51図36に代表される疑凹線文をもつ甕Fは、後期末葉から古墳前期にかけてのものと思われる。

壺形土器（第52図、第57図23～25）

壺形土器は口縁部の形態より、壺A～壺Eに分けることが出来る。

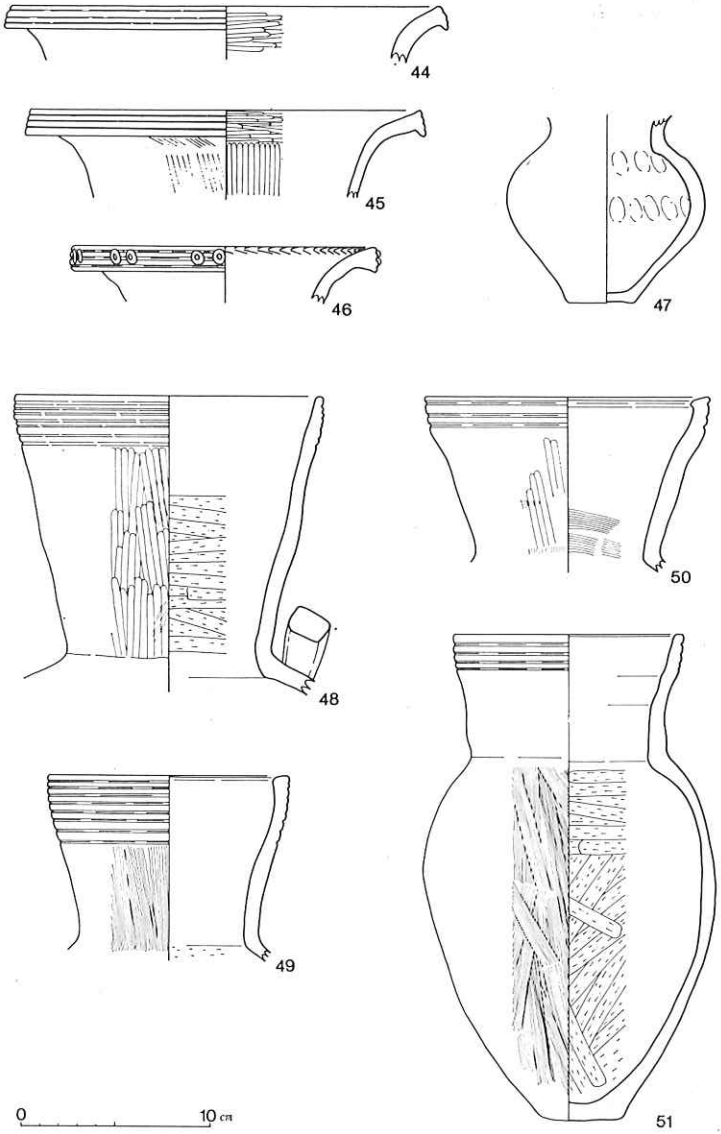
壺A　口縁部を外反させて、短い端面をつくる。第57図23は、口唇部に刻み目を施している。

壺B　外反した口縁がくりあげ口縁になり、端面に凹線文を施したもの。第52図44・45は外面ハケ目、内面にヘラ磨きがみられる。同図46は、凹線文を施した端面の上に円形竹管浮文を貼り付け、口縁内面上部には列点の綾杉文を施している。

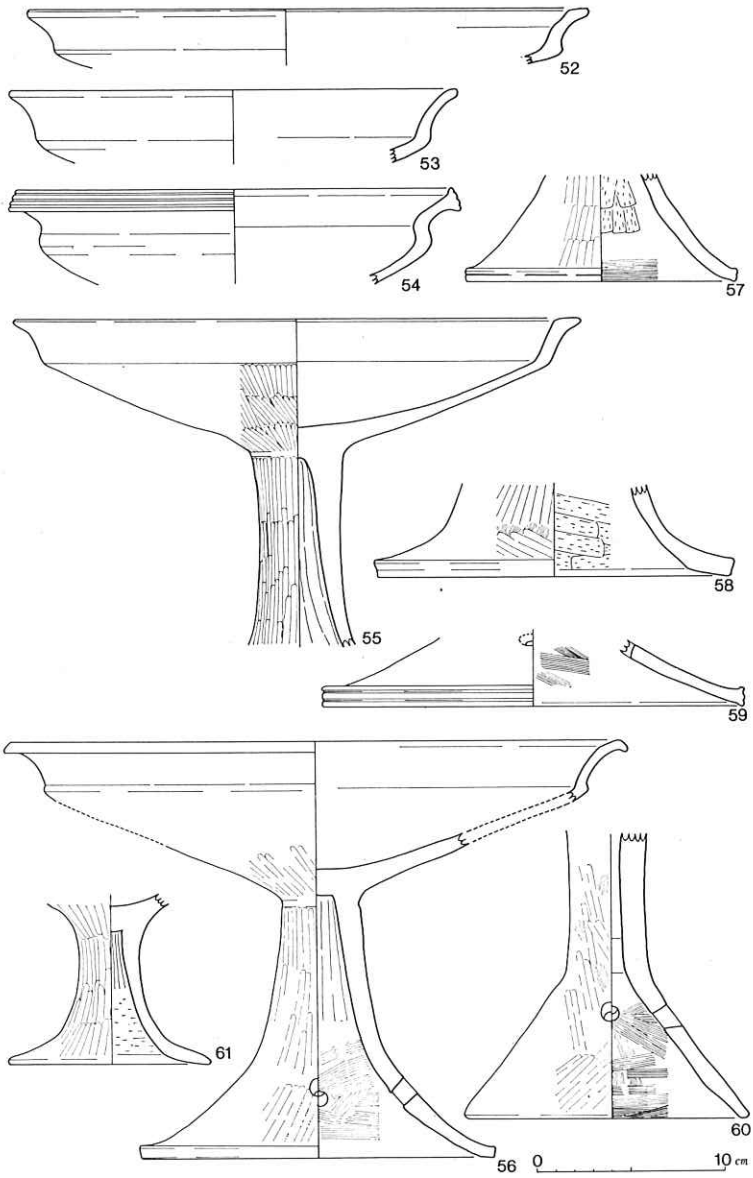
壺C　やや直立ぎみの頸部に小さな受け口状の口縁部がつくものである。第57図25は、外面横方向のヘラ磨き、内面はハケ目がみられるほか、胴部内面には粘土紐の痕跡が明確に認められる。

壺D　外反する口縁に幅広い口端面をもつものである。第57図24は、貼り付けてつくった複合口縁の端面に疑凹線文を施している。

壺E　やや外傾した口縁上部に凹線文がみられる短頸壺である。第52図48は、肩部に把手を有する大形のもので、外面はヘラ磨き、内面は横方向のヘラ削りがみられる。第52図49～51は同形態のものである。50は口端部を



第52図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ溝出土土器(5)



第53図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ溝出土土器(6)

肥厚させて平坦面をつくっている。51は頸部がしまらず、肩もあまり張らない縦長のものである。口縁内外面はヘラ磨き、胴部外面はハケ目、内面は細かいヘラ削りがみられる。安定の悪い底部を有する。

第52図48、第57図23は中期後葉、第52図44・45は後期前葉、第52図49～51は後期前葉から後葉にかけて、第57図25は後期後葉、第57図24は後期末葉と思われる。

高坏形土器（第53図、第57図26～29・32～34）

高坏は完形になるものがほとんどなく、坏部と脚部との形態の組み合わせがわかりにくいために、坏部と脚部を分けて分類した。

高坏・坏部A　ゆるやかに外反し、屈折して外湾ぎみに開き、端部は丸くおさめるものである。第53図53は内外面ともヘラ磨きがみられる。

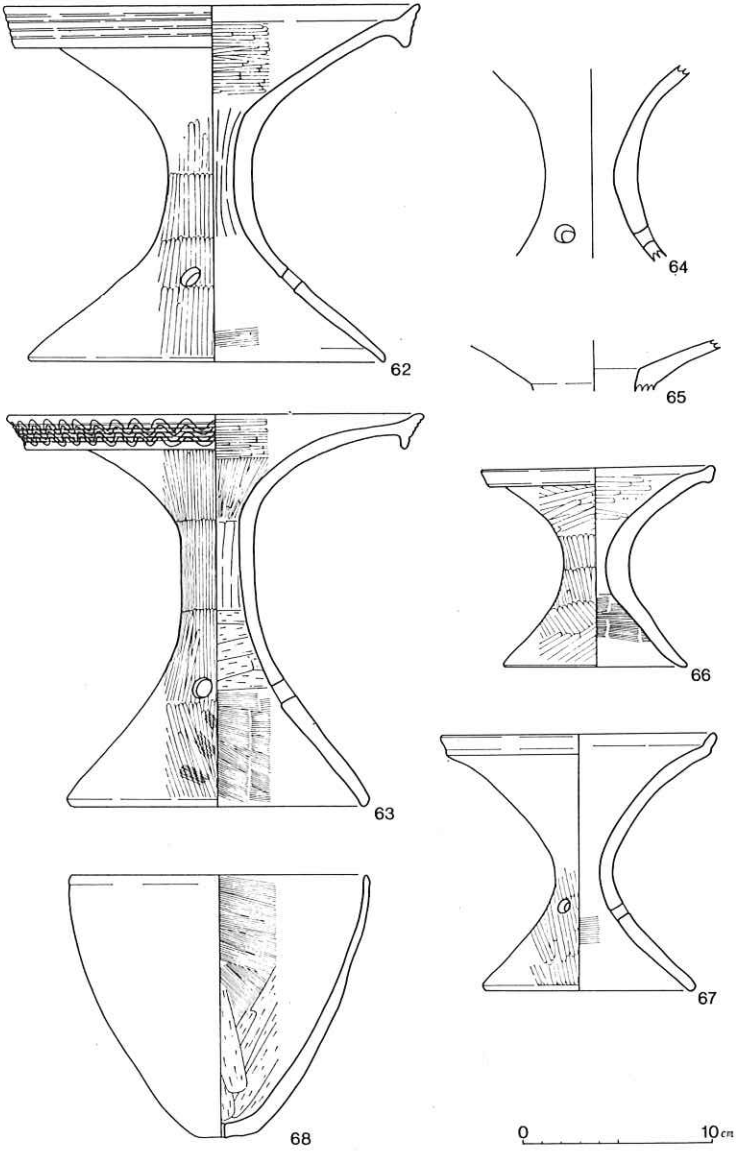
高坏・坏部B　ゆるやかに外反し、屈折して外湾した口縁の端部を肥厚させて平坦面をつくるもの。坏部径二五～三五センチの大形のものが多い。脚部は、第53図56のように裾広がりで凹線文を有しないものがつくと思われる。

高坏・坏部C　ゆるやかに外反して屈折したのち、外湾せずに直立ぎみの坏部をもつもので、端部は肥厚している。

高坏・坏部D　屈折して立ち上ったのち、再び外方に屈折して坏部に二段の段をつくるもので、口端部は肥厚して短い端面をもつ。

高坏・坏部E　坏部Dよりゆるやかに屈折して、幅広い口端面をもつものである。

高坏・坏部F　坏部Dの口端面をつまみ上げてくりあげ口縁をつくり、端面に凹線文を施すものである。第53



第54図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ溝出土土器(7)

図54は内外面ともにヘラ磨きがみられる。

高坏・脚部A　裾広がりの脚部に、小さな端面をもつものである。第53図56は外面は筅磨き、内面には刷毛目がみられる。第57図32は、やや幅を持った脚部端面に、半月形の刺突文をめぐらしている。あるいは、器台になるものかも知れない。

高坏・脚部B　円筒状の筒部から屈折して裾広がりの脚部をもつもので、端部は丸くおさめている。第53図60は、外面刷毛目の上よりヘラ磨き、内面はハケ目がみられる。

高坏・脚部C　裾広がりの脚部の端部を肥厚させて平坦面をつくり、凹線文を施しているもの。第53図58は内面ヘラ削り、59は内面ハケ目がみられる。

高坏・脚部D　裾広がりに外湾しながら開いた脚部の端部を薄くおさめる。第53図61のように、小形のものが多い。

高坏の坏部B・Cは中期後葉～後期前葉、坏部Fは後期中葉～後葉、坏部Dは後期後葉、坏部Eは後期末葉と思われる。

器台形土器（第54図62～67、第57図30・31）

器台A　坏部は大きく外反して、複合状の口縁部をつくるもの。口縁下部は垂下させる。第54図62は、口端面に疑凹線が施され、63は口端面に疑凹線を施したのちに、櫛描で波状文を描いている。両者とも脚部は裾広がりのままで終り、九重式器台のように脚端部が複合状にはならない。透かしは三方に入れられている。

器台B　器台Cとほぼ同様な形態であるが、口縁がやや立ち上って受け口状をなすものである。第54図67のように小形品で、脚部に三方の透かしをもつ。

器台C　外反して開いた口縁部を少しつまみあげて口端面をつくり出したもので、器台C同様小形品である。第54図66は脚部に透かしを持たないものである。

器台D　全形はわからないが、脚中部が筒状になるものである。

器台B・Cは、形態的には器台Aと変わらず小形化されたものと考えられる。この種の器台は、丹後・北陸地方にみられる形態のもので、弥生後期末葉〜古墳前期のものである。

甑形土器（第54図68）

底部に一孔開けられた甑で完形品である。内面はハケ目、胴部下半部にはヘラ削りがみられる。

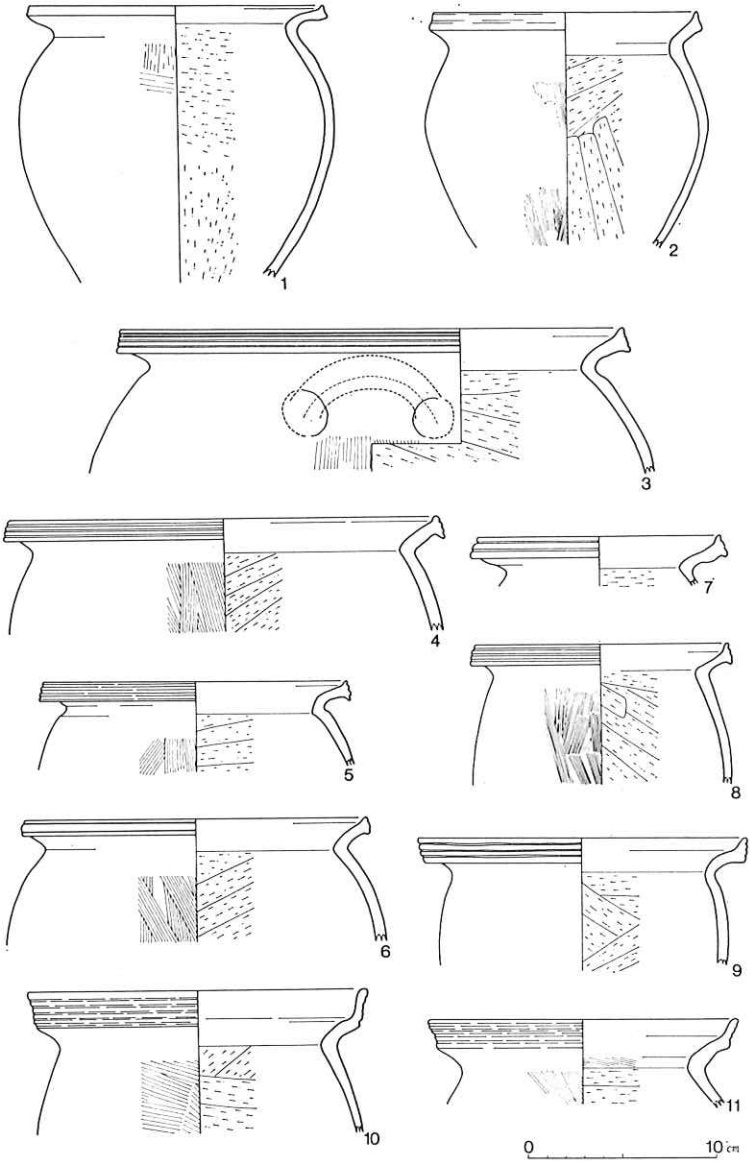
12トレンチb出土の土器（第58図）

1はくりあげ口縁に凹線文を有する甕Dで、肩はかなり張る。2は口端面に刻み目をつけている壺Aである。3〜5は甕Hで、胴部から外傾ぎみに伸びる肥厚した口縁を持つもので、5は外面ハケ目、口縁内面はハケ目がみられ、胴部内面はハケののちヘラ削りを行なっている。6・7は大きく張った胴部と、くの字形に屈折した口縁部を内面に肥厚させた平坦な端面をもつ甕Gである。8は体部に明瞭な稜をもたず、ゆるやかに外反する口縁を有する高坏である。

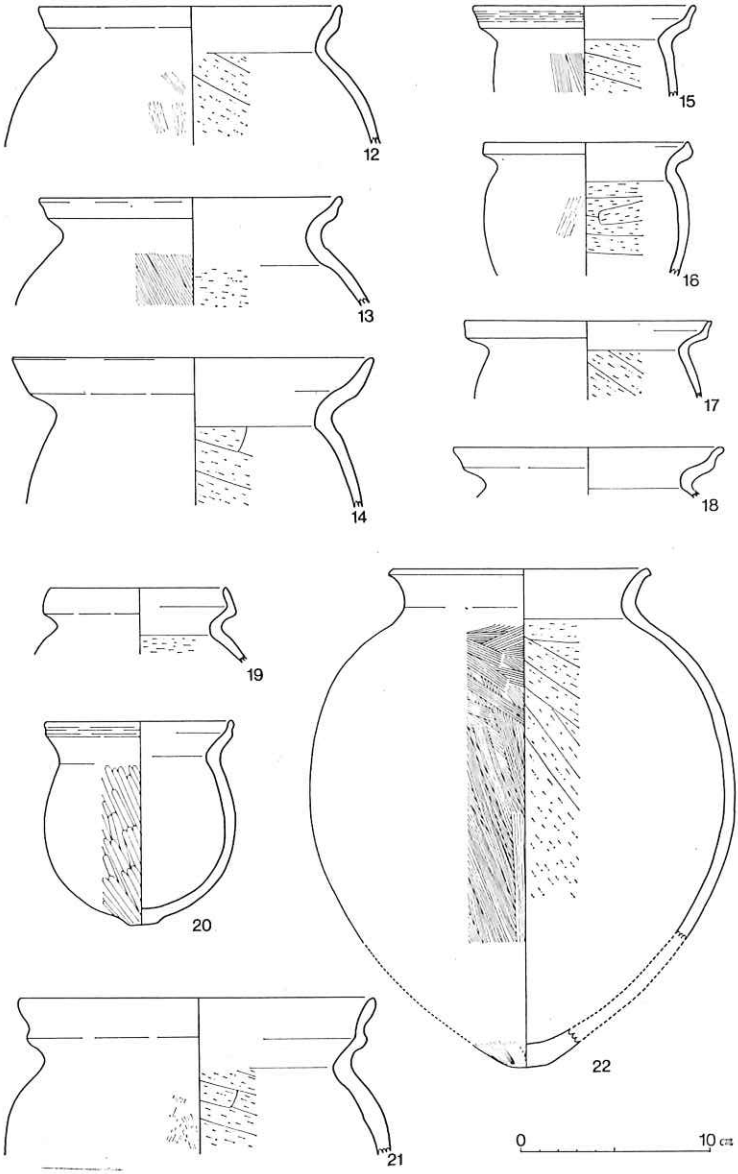
12トレンチD出土の土器は、3〜7のような布留式土器の特徴を有する甕が大勢を占め、そのほかの土器も古式土師器の範疇にはいるものが多い。

12トレンチC出土の土器（第59図）

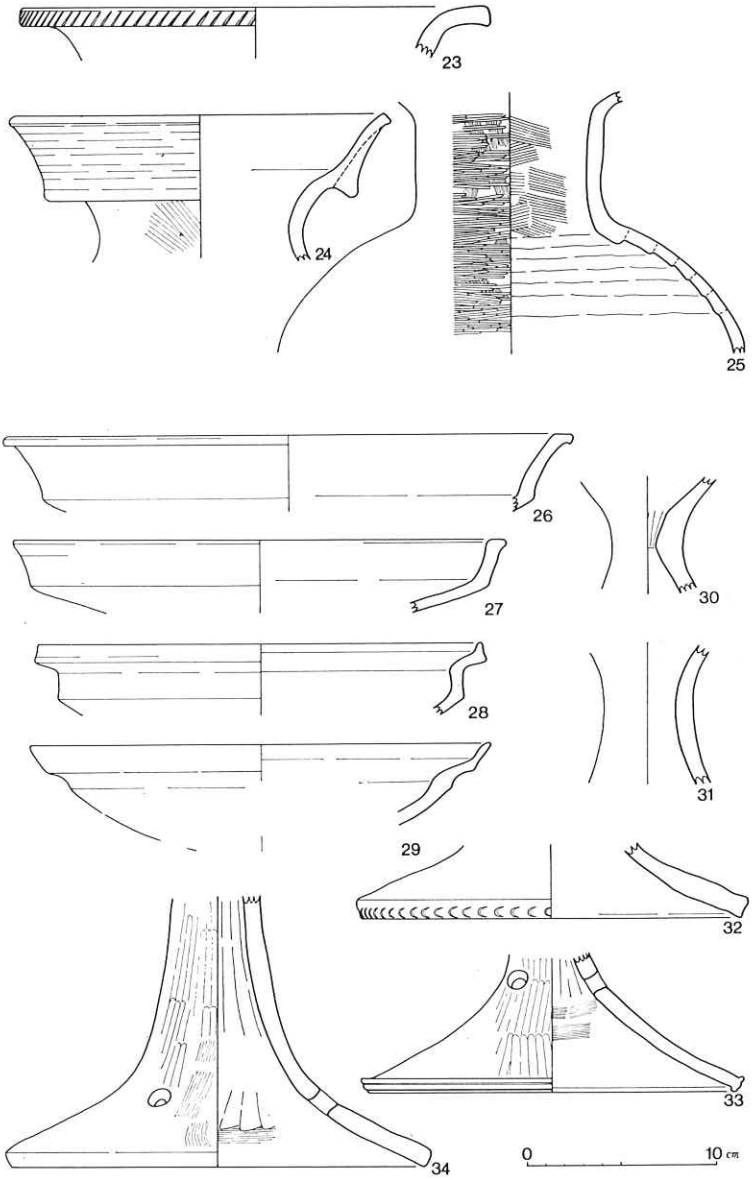
1はくりあげ口縁に三条の凹線文を施す甕Dである。2は受け口状の口縁を有する甕E、3は口端面に疑凹線文を施す甕Fである。4は甕Bで肩部は横ナデしてハケ目を消している。器壁は薄い。5は壺Cで、口端面に四



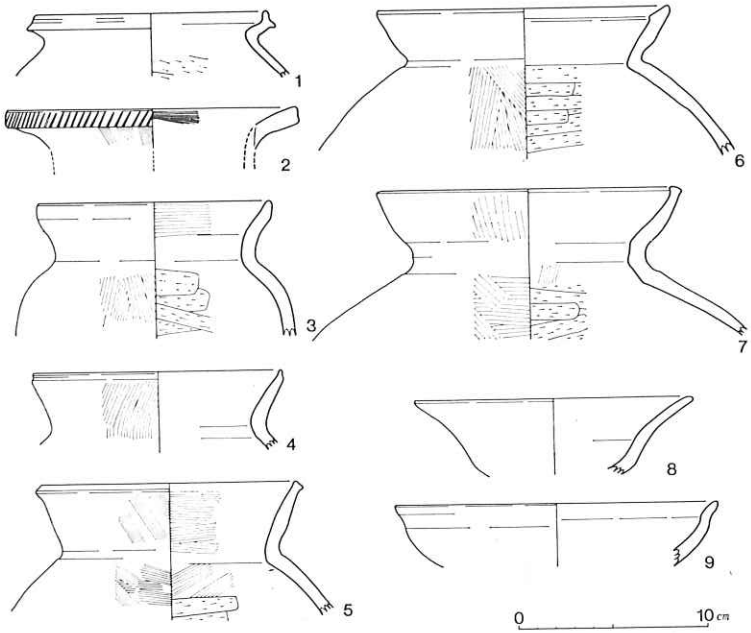
第55図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ出土土器(1)



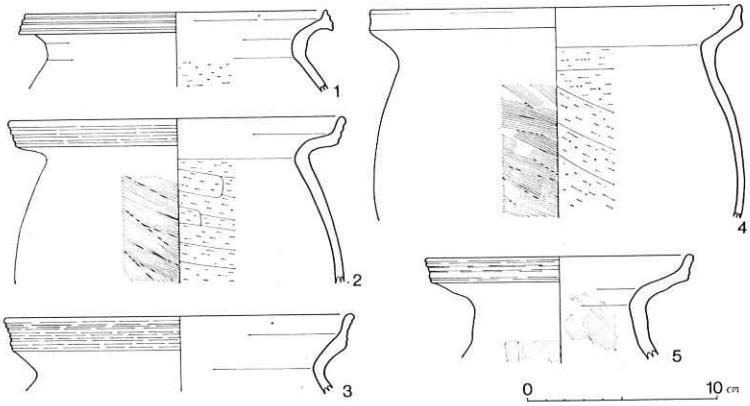
第56図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ出土土器(2)



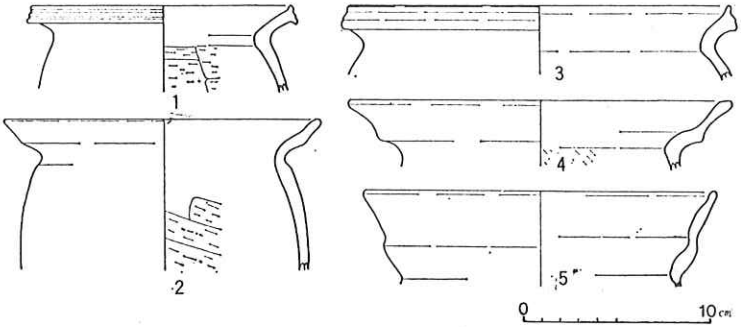
第57図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチ出土土器(3)



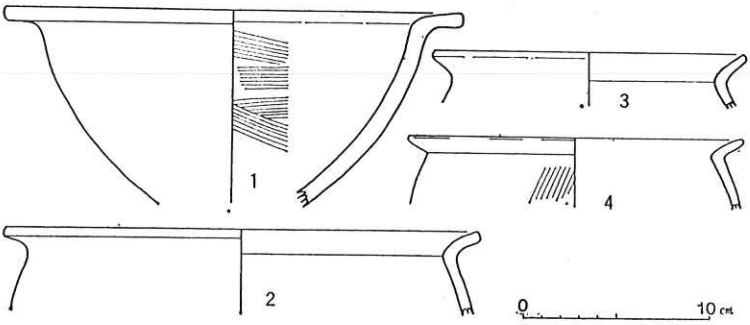
第58図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチb出土土器(4)



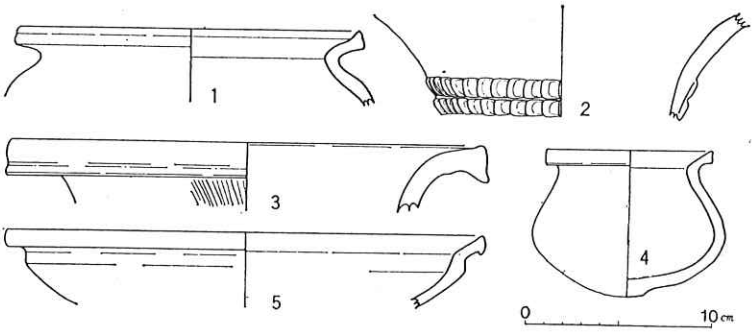
第59図　祢布ケ森東遺跡　12トレンチc出土土器(5)



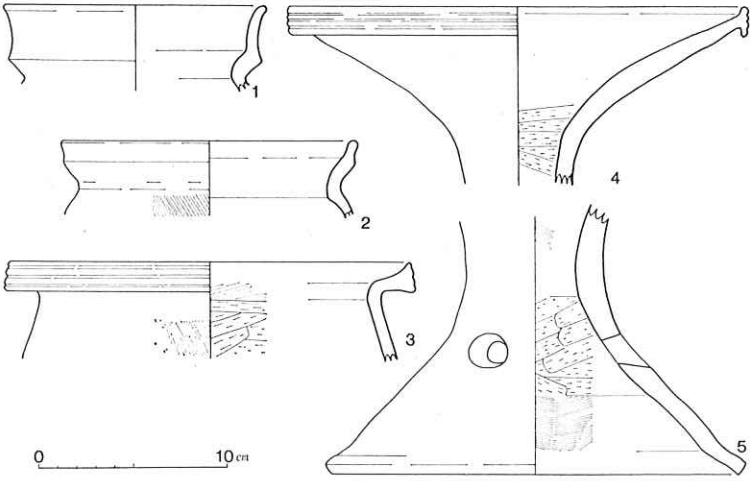
第60図　祢布ケ森東遺跡　5トレンチ出土土器



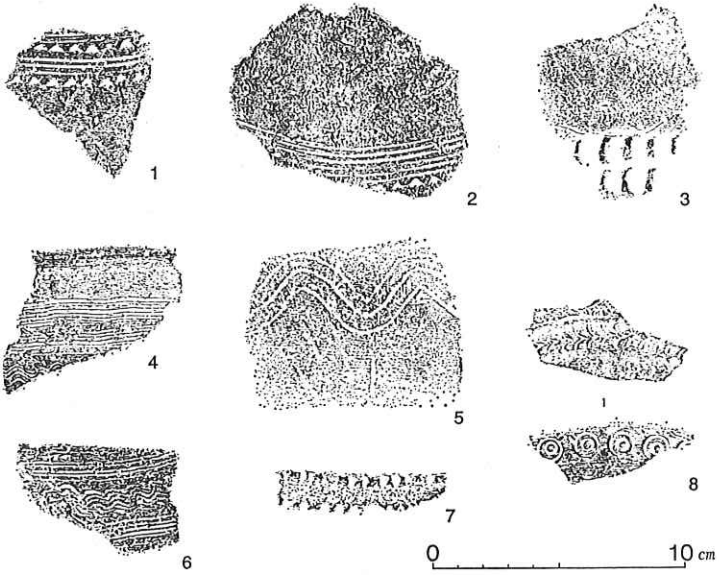
第61図　祢布ケ森東遺跡　5・6トレンチ出土土器



第62図　祢布ケ森東遺跡　8トレンチ出土の土器



第63図　祢布ケ森東遺跡　14トレンチ出土土器



第64図　祢布ケ森東遺跡　出土土器文様拓影

条の凹線文を施している。口縁部は横ナデを行なっている。

5トレンチ出土の土器（第60図・第61図1）

1は矢板列が検出された溝内出土の甕で、くりあげ口縁の端面に二条の凹線文を施し、甕Dに属す。2・4は凹線文を持たない甕Bで、4は外湾ぎみの幅広い端面をもつ。5は外反する口縁にゆるやかな段をつくり、口端内面を若干つまみあげている。第61図1は鉢形土器で、口縁部は体部から強く屈折して、平坦なテーブル状の面を作っている。内面はハケ目がみられる。

6トレンチ出土の土器（第61図2・3・4）

甕Cに属するものであるが、口縁部は短く外反しない。外面は粗いハケ目がみられる。6トレンチから出土する土器は、2～4のような甕が大勢を占める。口径一五～二〇センチのものが多いが、三〇センチ以上の大形のものもある。焼成は悪く、完形品になるものはない。

8トレンチ出土の土器（第62図）

1は甕Aに属するものである。焼成は悪い。2は壺形土器の頸部片であるが、胴部との屈折部に二段の指頭圧痕突帯文がめぐらされている。中期中葉～後葉のものである。4は小形坩で完形品である。剝落がひどく調整は不明である。径二・二センチの小さな突出ぎみの小さな底がつく。器高に比して胴径の大きな土器である。5は高坏Dに属するもので、端面には凹線文はみられない。

14トレンチ出土の土器（第63図）

1は直立して幅広い口端面をもつ複合口縁の甕である。4は器台Aの坏部で、端面に疑凹線文を施している。5は器壁の厚い重量感のある器台脚部である。透かしは脚部に三方入れられている。脚部内面下部にハケ目、上

第3表　祢布ヶ森東遺跡出土土器一覧

図番号	番号	器種	色調	胎土	計測値(cm) 口径	残存高	底(脚)径
第48図	1	甕D	淡灰褐色	砂を含む	一八・〇	五・五	
	2	〃	灰褐色	粗砂を含む	一八・四	四・七	
	3	〃	茶褐色	砂を含む	一五・〇	七・〇	
	4	〃	暗褐色	堅緻	一三・八	二・八	
	5	〃	〃	粗砂を含む	一六・〇	二・四	
	6	〃	灰褐色	密	一五・八	三・一	
	7	〃	〃	砂を含む	一五・六	三・九	
	8	〃	暗褐色	密	一五・二	三・〇	
	9	〃	赤褐色	密	一三・六	四・三	
	10	〃	灰褐色	粗砂を含む	一五・〇		三・六
	11	〃	暗褐色	砂を含む	一五・六	二・七	
	12	〃	暗褐色	砂を含む	一五・〇	四・二	
	13	〃	灰褐色	堅緻	一七・二	三・一	
	14	〃	明褐色	砂を含む	一七・九	七・八	
	15	〃	黒褐色	堅緻	一九・六	六・二	
第49図	16	甕D	淡褐色	粗砂を多く含む	一七・六	二・九	
	17	〃	黒褐色	密	一四・四	五・一	
	18	〃	暗褐色	粗砂を含む	一五・〇	五・〇	
	19	甕E	灰褐色	小石を含む	一九・二	七・七	
	20	甕D	淡褐色	密	一八・九	一四・二	

図番号	番号	器種	色調	胎土	計測(cm) 口径	残存高	底(脚)径
第49図	21	甕E	暗褐色	粗砂を含む	二〇・六	(完)三〇・四	四・三
	22	甕D	黒褐色	堅緻	一五・二	六・〇	
	23	甕E	暗褐色	粗砂を含む	一四・四	一〇・三	
	24	甕D	淡褐色	小石を含む	二一・八	四・九	
	25	甕B	茶褐色	堅緻	二〇・六	五・三	
	26	〃	赤褐色	小石を含む	一六・〇	四・三	
第50図	27	甕D	乳褐色	粗砂を含む	二五・八	二二・〇	
	28	〃	黒褐色	砂を含む	一九・〇	三・三	
	29	甕E	褐色	粗砂を含む	一六・四	一〇・一	
	30	甕B	赤褐色	小石を含む	一五・九	三・八	
	31	甕D	灰褐色	粗砂を含む	一六・二	三・二	
	32	甕A	暗褐色	密	一五・〇	二・二	
	33	甕B	茶褐色	粗砂を含む	一六・〇	七・〇	
	34	〃	褐色	砂を含む	一七・二	二〇・一	
第51図	35	甕F	赤褐色	粗砂を含む	一六・四	六・九	
	36	〃	暗褐色	砂を含む	一七・二	(完)二二・八	四・〇
	37	〃	黒褐色	密	一六・四	六・〇	
	38	甕E	褐色	砂を含む	一五・六	二・六	
	39	甕F	黒褐色	〃	一三・四	二・二	
	40	〃	赤褐色	小石を含む	一八・四	一七・〇	
	41	甕B	暗褐色	〃	一四・八	九・一	

42	甕A	黒褐色	粗砂を含む	一八・〇	五・五	一・七
43	甕B	褐色	〃	一五・二	(完)二五・五	
第52図						
44	壺B	暗褐色	堅、雲母含む	二二・八	二・八	三・四
45	〃	灰白色	砂を含む	二〇・五	四・五	
46	〃	茶褐色	堅緻	一六・〇	二・九	
47	小形壺	明褐色	粗砂を含む		九・八	
48	壺E	淡黄褐色	堅、砂含む	一六・〇	一五・七	
49	〃	褐色	堅、細砂混り	一三・〇	九・三	
50	〃	灰褐色	堅緻	一五・〇	八・七	
51	〃	淡褐色	堅緻	一二・〇	(完)二五・七	四・二
第53図						
52	高坏B	灰褐色	堅緻	二六・八	三・〇	一八・六
53	高坏A	淡褐色	砂を含む	二三・六	三・八	一四・〇
54	高坏F	赤褐色	堅緻	二三・二	五・一	一八・六
55	高坏B	灰褐色	砂を含む	三〇・二	一七・〇	二二・二
56	〃	〃	〃	三二・四	(完)二一・九	一五・一
57	脚部	暗褐色	砂を含む		五・六	一〇・八
58	〃	明褐色	粗砂を含む		四・八	
59	〃	暗褐色	堅緻		三・四	
60	〃	明褐色	砂を含む		一五・〇	
61	〃	赤褐色	〃		八・六	
第54図						
62	器台A	〃	〃	二一・八	(完)一八・八	一八・六
63	器台A	乳褐色	堅緻	二一・八	(完)二〇・六	一五・三
64	器台	赤褐色	砂を含む		九・七	
65	器台D	淡褐色	密		三・二	

図番号	番号	器種	色調	胎土	計値 口径	計値 残存高	計値 底(脚)径
第54図	66	器台C	赤褐色	密	一二・二	(完)一〇・六	九・六
	67	器台B	〃	粗砂を含む	一四・四	(完)一三・五	一一・〇
	68	甑	黄褐色	砂を含む	一五・六	(完)一三・八	三・四
第55図	1	甕A	淡褐色	砂を含む	一五・三	一四・四	
	2	甕D	褐色	〃	一四・二	一二・二	
	3	〃	淡褐色	粗砂を含む	二六・六	七・四	
	4	〃	黒褐色	〃	二二・六	六・〇	
	5	〃	淡褐色	砂を含む	一六・〇	六・〇	
	6	〃	淡灰褐色	〃	一八・四	六・四	
	7	〃	黒褐色	密	一二・八	二・五	
	8	〃	暗褐色	粗砂を含む	一三・二	七・二	
	9	〃	淡褐色	砂を含む	一七・二	六・七	
	10	甕F	黒褐色	〃	一八・〇	七・五	
	11	〃	褐色	粗砂を含む	一六・二	四・四	
第56図	12	甕B	赤褐色	砂を含む	一五・七	七・四	
	13	〃	〃	密	一五・八	五・六	
	14	〃	〃	小石を含む	一八・八	七・六	
	15	甕F	黒褐色	粗砂を含む	一一・八	四・九	
	16	甕A	淡赤褐色	砂を含む	一〇・九	六・八	
	17	甕B	淡褐色	〃	一三・〇	四・〇	
	18	〃	暗赤褐色	〃	一四・〇	二・五	

	19	〃	灰褐色	密	九・二	三・五	
	20	〃	茶褐色	堅緻	九・八	(完)一〇・七	一・四
	21	〃	黄褐色	粗砂を含む	一八・四	八・二	
	22	甕C	茶褐色	〃	一三・四		一・六
第57図	23	壺A	乳褐色	石英が多い	二四・四	二・六	
	24	壺D	乳灰色	粗砂を含む	一九・四	七・一	
	25	壺C	茶褐色	粗砂を含む		一三・七	
	26	高坏B	明褐色	砂を含む	二九・六	三・九	
	27	高坏C	淡褐色	小石を含む	二六・〇	三・八	
	28	高坏D	赤褐色	砂を含む	二三・六	三・七	
	29	高坏E	〃	小石を含む	二四・四	五・五	
	30	器台	淡褐色	粗砂を含む		五・七	
	31	〃	〃	砂を含む		七・三	
	32	高坏?	明褐色	堅緻		三・八	二〇・〇
	33	〃	乳灰色	〃		七・四	一九・四
	34	〃	灰褐色	堅緻		一四・三	二三・〇
第58図	1	甕D	明褐色	粗砂を含む	一二・四	三・二	
	2	壺A	淡褐色	緻密	一五・六	二・二	
	3	甕H	赤褐色	密	一二・六	七・〇	
	4	〃	明褐色	粗砂を含む	一三・二	四・二	
	5	〃	〃	密	一三・八	七・二	
	6	甕G	黒褐色	細砂を含む	一五・六	七・八	
	7	〃	明褐色	粗砂を含む	一六・〇	七・八	
	8	高坏	暗褐色	小石を含む	一五・〇	四・〇	

図番号	番号	器種	色調	胎土	計測値(cm) 口径	残存高	底(脚)径
第59図	1	甕D	明褐色	小石を含む	一六・〇	四・〇	
	2	甕E	黒褐色	粗砂を含む	一八・〇	八・八	
	3	甕F	赤褐色	密	一八・六	三・八	
	4	甕B	〃	砂を含む	一九・八	一一・〇	
	5	壺C	黄褐色	堅緻	一四・二	五・六	
	9	〃	赤褐色	密	一七・二	三・二	
第60図	1	甕D	灰褐色	砂を含む	一四・〇	四・五	
	2	甕B	淡褐色	〃	一六・八	一〇・〇	
	3	甕D	〃	〃	二〇・二	三・七	
	4	甕B	茶褐色	〃	二〇・二	三・五	
	5	甕I	淡褐色	砂を含む	一八・六	四・九	
第61図	1	鉢C	乳灰色	砂を含む	二四・四	一〇・三	
	2	甕C	淡褐色	〃	二五・二	四・三	
	3	〃	灰褐色	〃	一六・六	二・八	
	4	〃	淡褐色	粗砂を含む	一八・〇	三・六	
第62図	1	甕A	淡褐色	砂を含む	一八・〇	三・七	
	2	壺A	赤褐色	小石を含む		五・一	
	3	〃	淡褐色	砂を含む	二五・四	四・五	
	4	小形坩	灰褐色	粗砂を含む	八・八	(完)七・七	
	5	高坏D	乳褐色	砂を含む	二五・六	三・八	二・二

第63図					
1	甕	褐色	粗砂を含む	一三・六	四・二
2	〃	黒褐色	小石を含む	一五・六	四・〇
3	〃	褐色	堅緻	二一・二	五・一
4	器台	乳褐色	砂を含む	二四・二	七・三
5	〃	〃	〃		一三・四	二一・六

部にヘラ削りがみられる。1・2は溝内出土の土器で、4・5はそれより上面の層より出土しているが、土層の堆積状況からみて、4・5は河川が氾濫した時に再堆積したものと思われる。

祢布ケ森東遺跡出土の土器は、図示した以上に多量に出土しているが、破片のため計測しにくい土器片の中に文様が認められるものがある。第64図に示したものがその一部である。1・2は櫛描直線文に三角刺突文を組み合わせた壺の破片で、中期前葉のものであろう。4は肩部に櫛描直線文と波状文を組み合わせた甕の口縁部片で、同じく中期前葉のものである。3は指頭圧痕突帯文をめぐらした壺の頸部片で、中期中葉〜後葉のものである。5〜7は中期後葉のもので、7は口唇部に刻み目をつけたものである。8は、垂下口縁の内面及び外面に竹管文と綾杉文のスタンプを押したもので、器台になるものと思われる。スタンプ土器は山陰にみられるもので、その影響が考えられる。

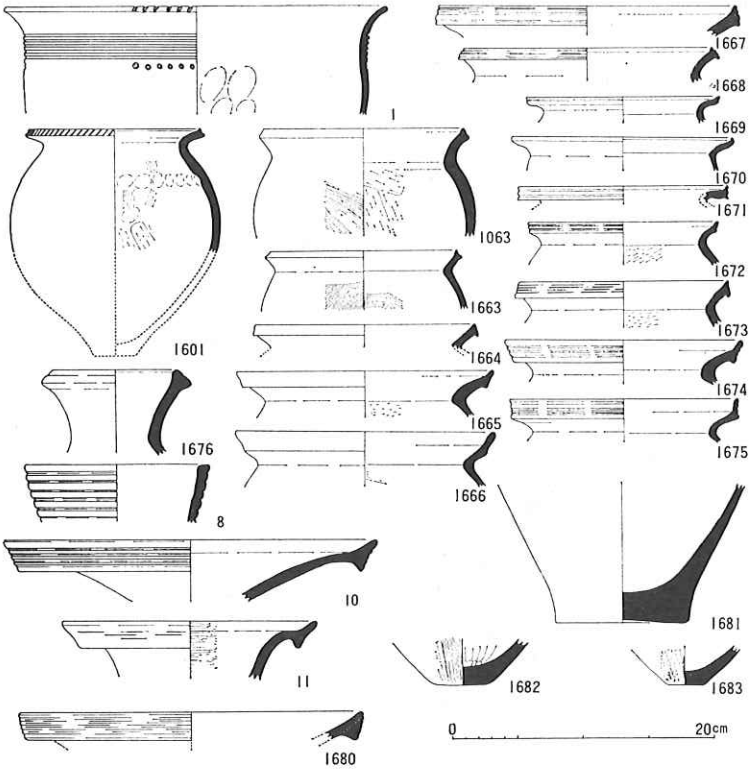
以上、祢布ケ森東遺跡からは石斧などの石器や土錘なども出土しているが、ここでは土器を中心に取り扱った。出土した土器が住居址から出土する土器のようにセット関係がつかめないのが残念である。

(2) 祢布ケ森西遺跡

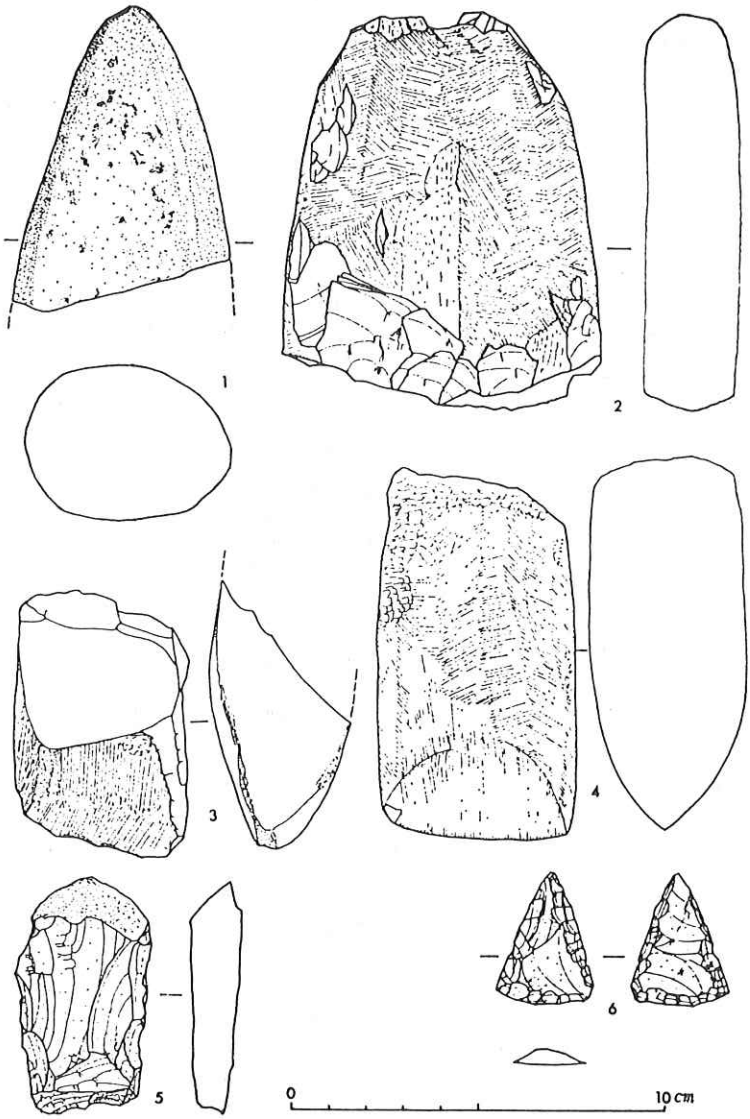
祢布ケ森西遺跡は、国鉄山陰本線江原駅の西方七〇〇メートルの所に位置する。

昭和四七年、国道三一二号線のバイパス道建設が計画された。この時、路線が但馬国分僧寺跡と祢布ケ森遺跡を横断することが確認されたため、計画路線が五〇〇メートル西方へ変更された。しかし、この地域一帯にも、土師器や須恵器片が散布していたため、昭和四八年～昭和四九年にかけて、一次から五次までの発掘調査が実施された。

その結果、須恵器・土師器・緑釉陶器片などの遺物包含層や、井戸、掘立柱列などの遺構が検出され、奈良時代後期～平安時代にいたる官衙的性格をもつ遺跡であることが判明した。



第65図　祢布ケ森西遺跡出土土器



第66図　祢布ヶ森西遺跡出土石器

これらのものとは別に、B地区の堆積土層中より縄文土器、石器、弥生土器が出土している。東方には祢布ヶ森遺跡が周知の遺跡として知られていたため、この遺跡は祢布ヶ森西遺跡[21]と命名された。

弥生土器（第65図）

1は口径二八・五センチの甕である。ゆるやかに屈折して外反した口縁の端面に刻み目を施し、頸部下には五条のヘラ描沈線と、その下に竹管の刺突文を施している。中期前半のものである。1601は、くの字状に強く屈折した口縁の端面に、刻み目を施している。胴部内面には、ハケ目とヘラ削りがみられるほか、肩部内面に指頭圧痕がみられる甕である。中期中葉～後葉のものであろう。1063・1663～1666は口端面に凹線文がない甕である。1663は、胴部内外面に刷毛目がみられる。1671～1675などは口端面に凹線文がある甕で、口縁はくりあげ口縁になるものが大半である。1657は受け口状の口縁をもつ。11は壺で、複合状の口縁端面に疑凹線が施されている。10は器台の坏部で、口径二八・七センチ、口縁下部を若干垂下させて、幅広い端面に凹線を施している。1680もおそらく器台の坏部であろう。端面には疑凹線がみられる。

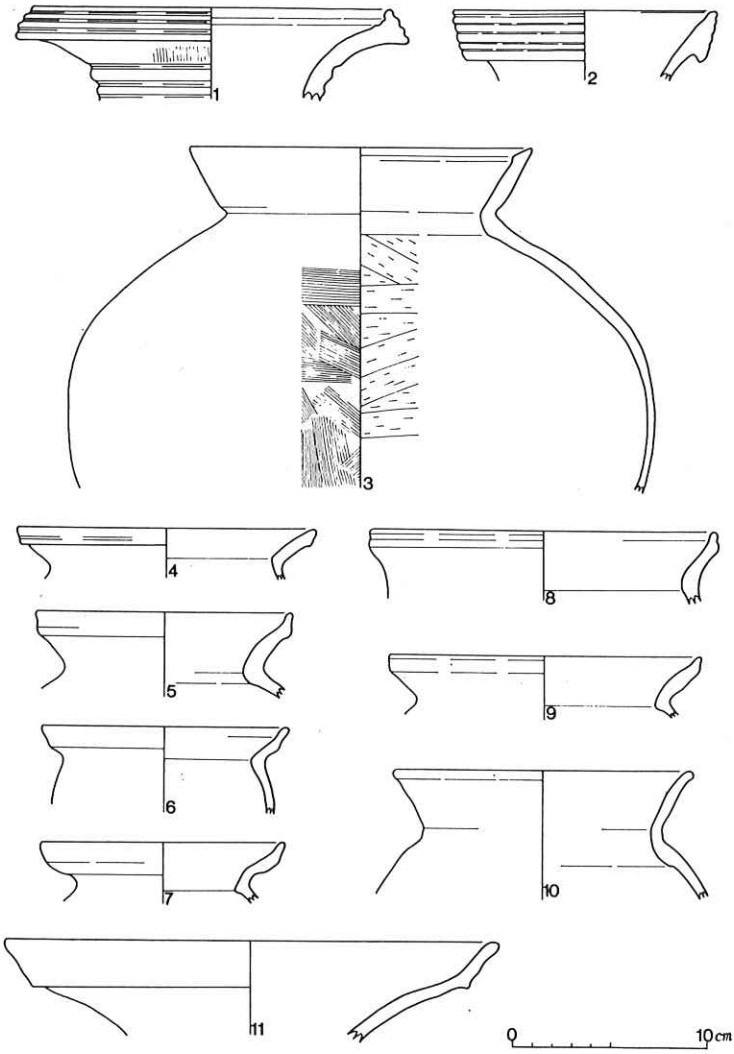
土器は、このほかに、裾広がりに開く高坏の脚部や、蓋形土器、底部が出土していて、弥生中期～後期の様相を示している。

石器

第66図に示した通り、安山岩・凝灰岩・砂岩製などの磨製石斧が四点、石鏃が一点出土している。

(3) 森山遺跡

ほ場整備の事業に際して、縄文時代の石器が採集された遺跡である。また弥生土器も表面採集されていて、住居跡等の遺構が存在する可能性も考えられる。



第67図　森山遺跡採集土器

図示した土器は、地元の研究者によって採集されたものである。（第67図）

壺形土器（1・2）

1は外反した口縁の端部を肥厚させて端面をつくり、三条の凹線を施している。頸部にも凹線がみられる。口径一七・五センチである。2は、貼り付けてつくった複合状の口端面に凹線を施している。

甕形土器（3～10）

3は、布留式土器と一般に呼ばれる肥厚した口縁を有する古式土師器である。肩は大きく張り、胴部中ほどは器壁が非常に薄くなっている。口径一八センチ、胴部最大径三〇・七センチである。外面肩部は横ナデでハケ目を消している。胴部内面はヘラ削りがみられる。4～7・9は、口端面に凹線文がみられない甕である。焼成は悪い。これらは、弥生後期のものである。

器台形土器（11）

11は器台の坏部である。ゆるやかに外反したのち屈折して端面をつくっている。口径二五・八センチである。裾広がりの脚部がつくものと思われる。

(4) 南八代田遺跡

南八代田遺跡は、山陰本線江原駅の北東約三キロの地点、八代谷入口付近に位置している。遺跡確認の発端はこの八代川改修工事に機縁している。

昭和五三年に大きく蛇行して流れる八代川の流路付け替え、および整備を含めた改修工事が実施された。この河道付け替え工事の際に、新しく河道となる水田を掘り下げていたところ、深さ約一～二メートルのところより、完形品を含む多量の弥生式土器が出土したため、緊急調査が行われた。

第68図・第69図に示した土器は、発見当初の採集品および緊急調査の出土遺物である。

甕形土器（2・3・5～7・11）

口端面に凹線文をもつもの（2・5・7）と、もたないもの（3・6・11）の二種がある。11は口径二三・〇センチの大形のものである。外面はハケ目、内面はヘラ削りがみられる。胴部はほとんど張らず、器壁は非常に薄い。3・6は同器形のもので、胴部からわずかに屈曲する肥厚した口縁をもつ。外面はハケ目、内面ヘラ削りがみられる。

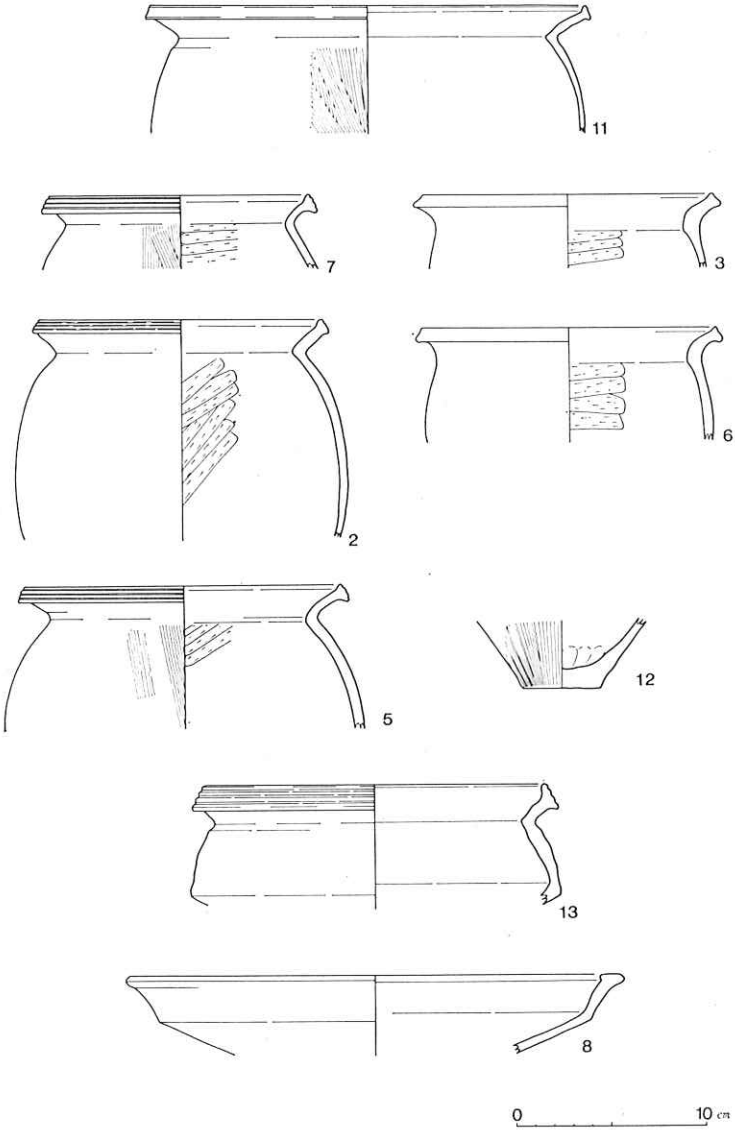
2・5・7はくの字に屈曲した口縁の端面に三条の凹線をめぐらしている。外面はハケ目、内面はヘラ削りがみられる。

壺形土器（1・4・9・10・14・16・17）

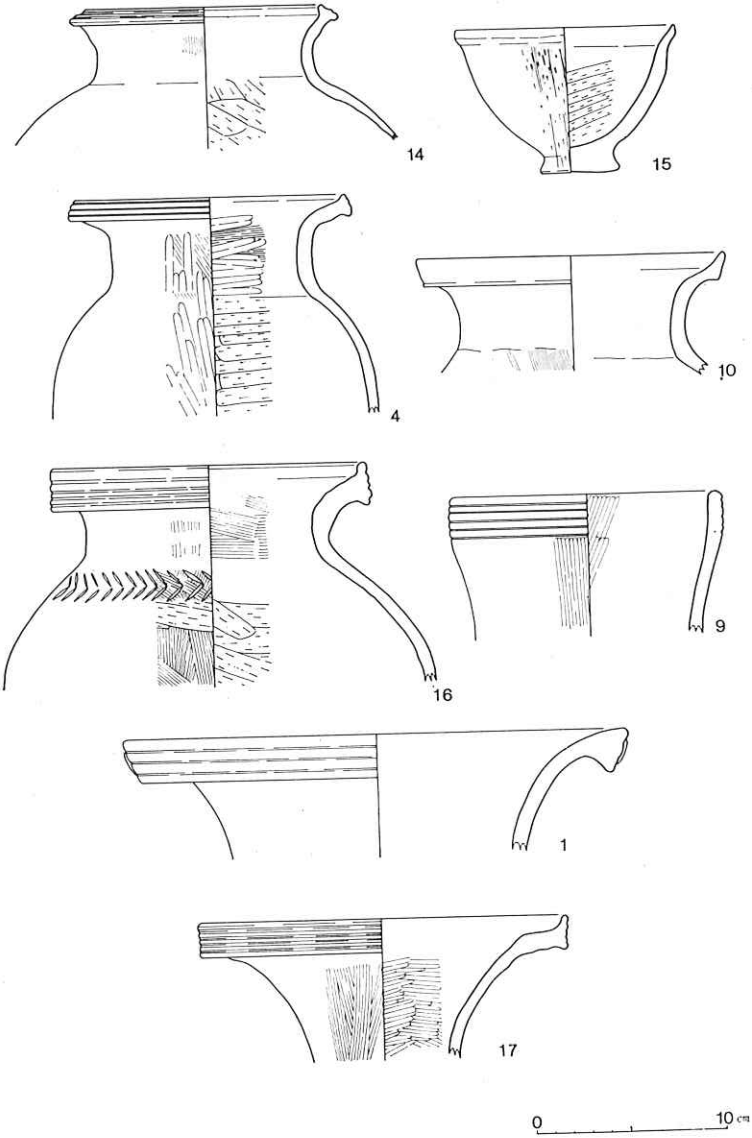
4・14・16は外反した口縁の端部を肥厚させて上下に広げ、凹線を施している。4は胴部外面及び口縁内面は、ハケ目の上よりヘラ磨き、胴部内面はヘラ削りがみられる。16は口縁端面がかなり大きく広げられている。ヘラ磨きはみられず、肩部には櫛で刺突された羽状文がめぐらされている。1は外反した口縁の端面下部が垂下するもので、凹線を三条施し、その上に円形浮文を貼り付けている。9は短頸壺になるもので、口縁上部に凹線が五条施されている。内外面ともにヘラ磨きがみられる。17は大きく外反する口縁をもつもので、あるいは器台になるものかも知れない。外面はハケ目、内面はヘラ磨きがみられる。

その他の土器

8は高坏形土器の坏部で、口縁端部が肥厚して平坦面をもつ。口径二六・四センチの大形のものである。13は台付鉢形土器の体部になるものであろう。甕形土器と同様、口縁端面には凹線文が施されている。15は鉢形土器



第68図　南八代田遺跡出土土器(1)



第69図　南八代田遺跡出土土器(2)

で胴部からわずかに屈曲してのびる口縁をもち、突出した平底をもつ。内外面ともにヘラ削りがみられるが、外面にはハケ目も部分的にみられる。

これらの土器は時期的には弥生後期前半～後半のものと思われる。

八代川改修工事現場より出土した土器は、このほかにも多く採集されていて、それらの土器も凹線文とヘラ削り手法を主体とするものでほぼ様相は同じである。[21] この採集された土器のなかで、胎土が異なり、チョコレート色の色調を呈する壺形土器があり、河内からの搬入品ではないかと思われるのは注目に値するものである。

(5) 水上遺跡

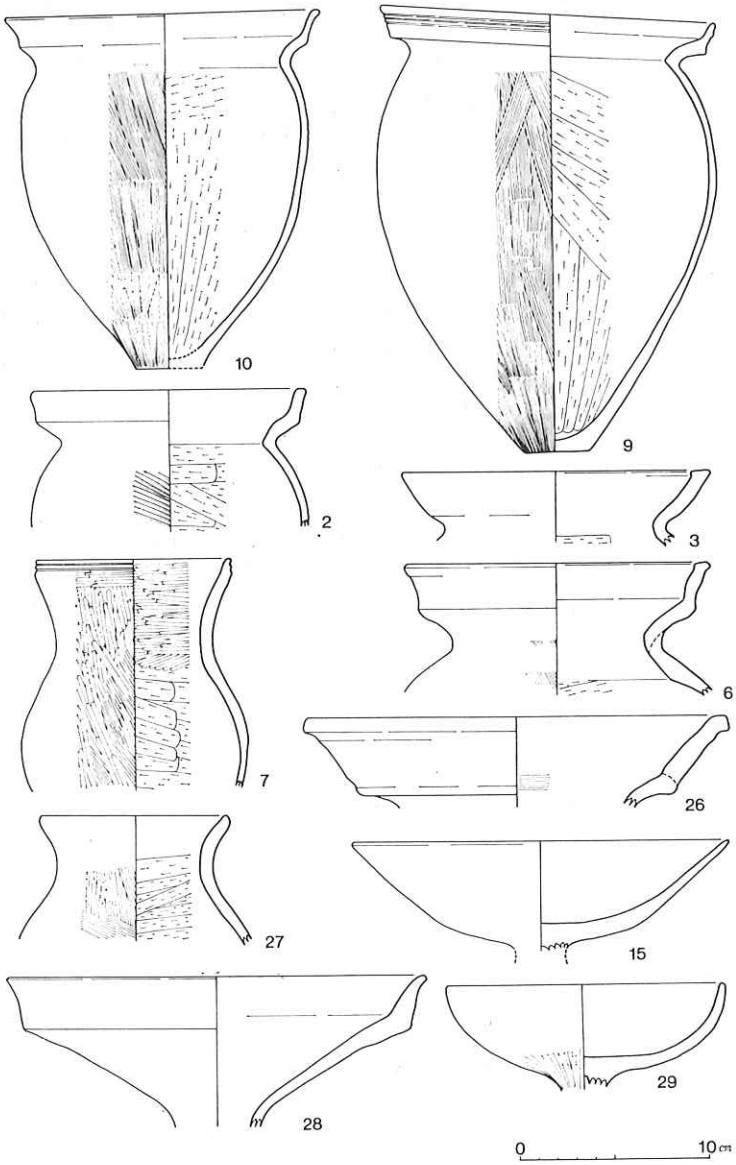
水上遺跡は、山陰本線江原駅の北約一キロメートル、日高町東中学校付近に位置する。

昭和四〇年に東中学校が水上地区に新設されることになり、建設工事がその年の暮れより開始されたが、工事が進むにつれて、弥生土器、土師器、須恵器、瓦等が多量に出土した。遺跡確認のための緊急調査がなされた。調査はその後三次にわたって実施され、古墳時代前期の掘立柱の建物が検出されたといわれている。しかし弥生時代の遺構についてはつかみきれない状態であった。

水上遺跡より出土した遺物の中で、弥生土器・土師器のみをとりあげて第70図に示した。[22]

弥生土器・土師器

2・3・9・10は甕形土器である。9は口径一七・八センチ、器高二三・〇センチの平底の甕で、受け口状の口縁の端面に疑凹線を施す。外面ハケ目、内面ヘラ削りがみられ、外面にはススが付着している。この甕の胴部外面には叩き目がみられる。3は口縁端曲が肥厚して平坦面をつくっている布留式土器の特徴を有する古式土師器である。7は短頸壺で、口縁上部に二条の凹線をめぐらしている。外面はハケ目の上よりヘラ磨き、口縁内面



第70図　水上遺跡出土土器

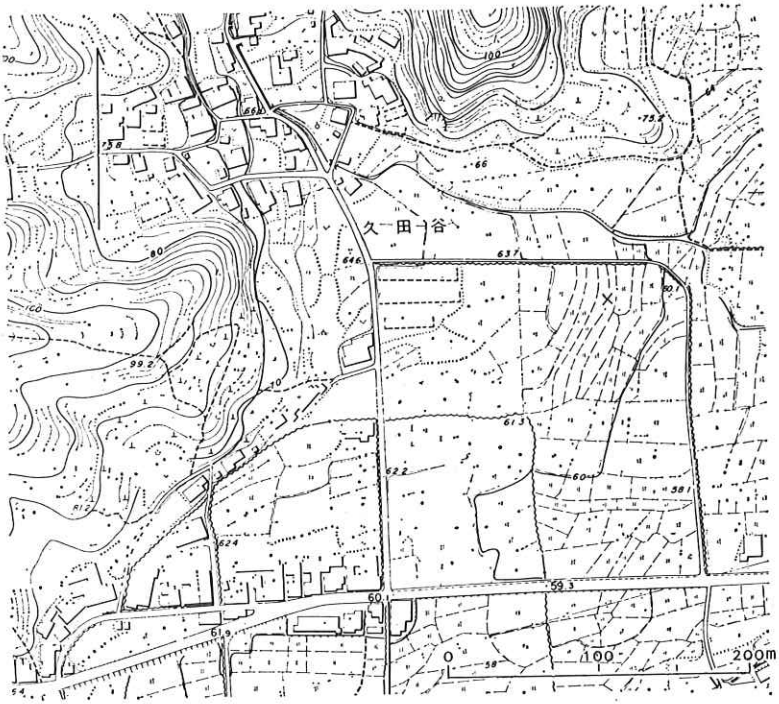
はヘラ磨き、胴部外面はヘラ削りがみられる。6・26は古式土師器の壺の口縁部で、26は口径二二・六センチの大形品である。15・29は高坏の坏部で、ゆるやかに外反しているため、段がつかず稜線はみられない。28は器台になるもので、口径二二・二センチである。口縁端面には凸線はみられず、ヨコナデで仕上げている。弥生土器は後期後半のものである。

水上遺跡の北東約一五〇メートルの地点に但馬国分尼寺の礎石があり、昭和四一年七月より、礎石周辺の発掘調査が実施され、須恵器・瓦類など水上遺跡出土のものと同様のものが検出されている。このため、かなりの範囲が破壊されたとはいえ、水上遺跡は、国分尼寺と何等かの関係のある重要な遺跡といえよう。

(6) 久田谷遺跡出土の銅鐸

この銅鐸は、昭和五三年五月に県営ほ場整備の工事中、発見されたものである。銅鐸は、農道を設置するためにパワーショベルで掘削中、土中からわずかに金属片が露出しているのを検出したのが発見の動機であった。ところが、土中にまだ多くの金属片が一塊となって埋れていたため、付近を探索していると、農道設置のために盛土した中から、さらに一塊の金属片を発見、それらをすべて採集したところ銅鐸であることが判明した。二箇所から発見した金属片は、最初一箇所にあったものをパワーショベルで二分し、それを農道の盛土に積んだものと思われる。発見したとき土に埋もれていた部分は、赤褐色を呈しており、土に埋もれていなかった部分は、銅錆特有の青緑色を呈していた、という。

銅鐸の発見された周辺は、昭和五二年一〇月に県営ほ場整備事業の工事着手に先立ち、兵庫県教育委員会と日高町教育委員会が合同で確認調査を実施した地域である。その結果第2～4グリッドにおいては、暗灰褐色土を切り込んだ土坑、柱穴、溝状遺構と、遺構内より弥生時代後期（畿内第五様式併行期）から古墳時代前期（布留



第71図　久田谷遺跡の位置（×印）

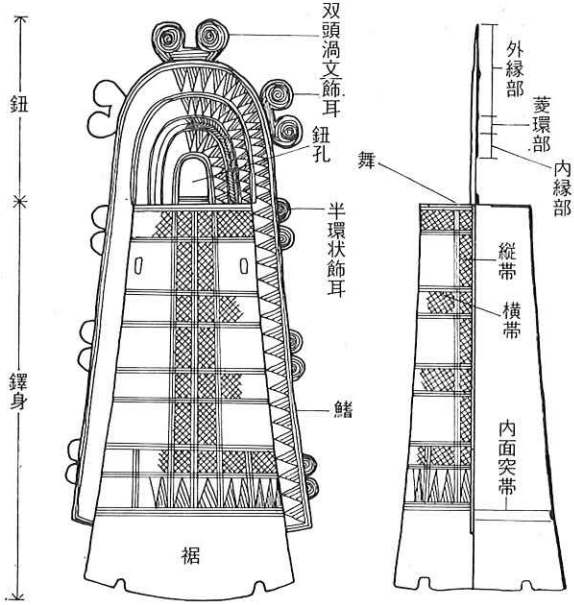
式併行期）の土器片が出土した。なお、工事にあたっては事前に排水路設置の位置を変更するなど、遺構の保存に努めた。

銅鐸とは、弥生時代につくられた青銅製の鐘で、五穀豊穣を祈る農耕祭祀に用いられた祭器と考えられている。形は、釣鐘状を呈しており、内部には舌とよばれる青銅製の棒をつるして揺り鳴らしたものである。大きさは、一〇センチ前後のものから一メートルを越える大形のものまである。

久田谷遺跡で発見された銅鐸は、全て五～一〇センチ前後に壊れ、復元が困難であるため高さ、幅、重量については明確にすることが困難である。しかし、銅鐸の破片が一一七片あり、その中には双頭渦文飾耳、鈕、舞、鰭、半環状飾耳、

鐸身の部分が認められているので、ある程度全体の文様構成を知ることができる。

鈕および鰭の外画は、三条の突線を付加し、その内側には内向する鋸歯文帯を配している。鈕にはさらにその内側に綾杉文を飾った菱環文様帯を二条、その両側に二～三条の突線を付加している。またそれぞれの菱環文様帯の内側には内向する鋸歯文帯を配し、鈕孔の周囲には二条の突線を付加している。外縁には、頂部、左右両側に双頭渦文飾耳がつく。頂部の飾耳は左右のものよりもわずかに大きくなっている。鰭の外縁には高さ三センチの半環状飾耳がつく。鐸身は袈裟襷文で飾られており、四帯の横帯と三帯の縦帯を交差させて用字形の六つの区画にわけている。袈裟襷文帯の輪郭線には三条の突線を付加し、その中央にも三条の軸突線を付加している。横帯の軸突線は鰭まで貫通している。下辺横帯には上向する鋸歯文帯を配し、下方には四条の突線が付加している。裾部内面には、幅一センチ、高さ〇・五センチの断面半環状の突帯が一条巡っている。また、裾部外面には一条の突線が認められる破片があり、下辺横帯の四条突線の下にさらに一条の突線が付加する可能性がある。

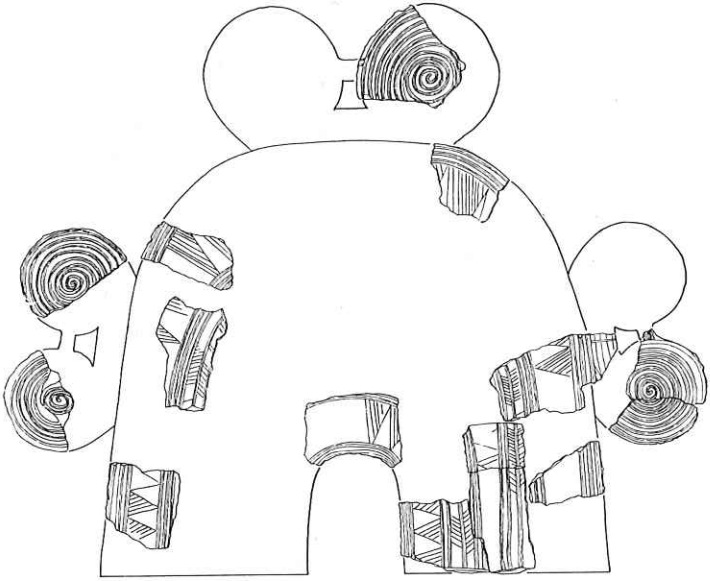


第72図　銅鐸名称図

これらの破片の割口は古く、工事中に壊されたものではなく、壊れた状態で廃棄、あるいは埋められたものであろう。ただ、敲きつけたり、鑢(やすり)で切り離したような痕跡は認められないため、人為的に壊したと断定はできないが、破片の中には著しく歪(ひず)んだものや、亀裂(きれつ)の入ったものが多く自然に壊れた可能性は少ない。

この銅鐸の型式は、佐原真氏の分類によると、[24]鈕、飾耳、鰭、鐸身に見られる突線、さらに鰭まで突く横帯の軸突線から見て、突線鈕第V型式と判断され、終末期の銅鐸である。銅鐸は文様構成から見て、一個体の銅鐸と考えて矛盾はなく、およそ全体の三分ノ一から四分ノ一の破片が見つかったものと思われる。

では、この銅鐸はいつ頃廃棄されたものかを考えてみたい。遺跡の確認調査で出土した土器は、弥生時代後期から古墳時代前期のもので、銅鐸の型式から考えてもおそらくこの時期に廃



第73図　銅鐸鈕部推定復原図

棄されたものと思われる。しかし、最近工事中に付近から出土した土器を見る機会を得たが、弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式（新）併行期）から古墳時代前期（布留式併行期）に至る土器が含まれていることがわかった。また、銅鐸片の出土が発掘調査により遺構内から出土したものではないことなどから、廃棄の詳細な位置付けについては今後の検討を必要とする。

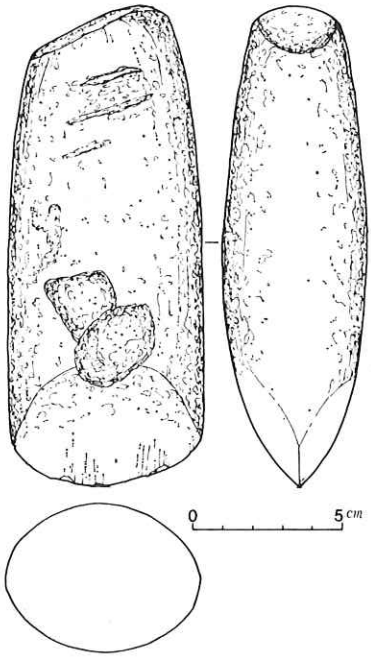
(7) その他の遺跡

現在破壊されて消滅しているが、遺物が採集されているものを紹介しておく。

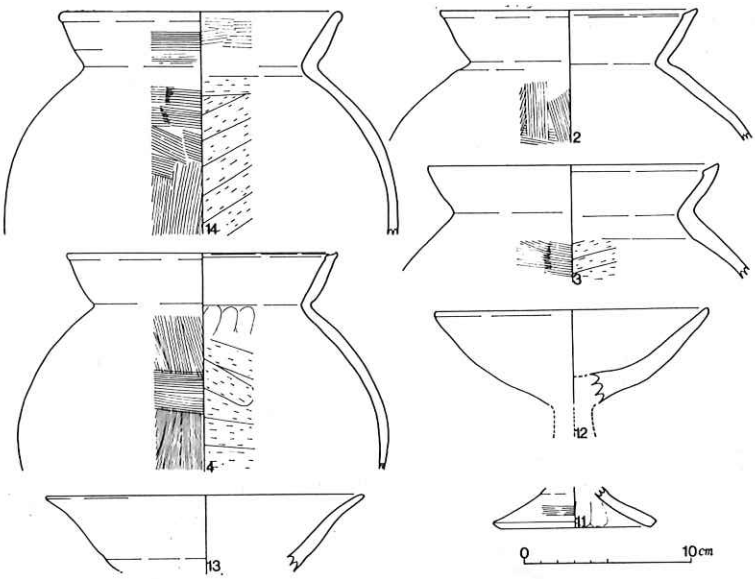
磨製の太形蛤形石斧が、浅倉兵主神社境内、庄境より出土している。第74図にあげているのが浅倉兵主神社境内より出土したもので、長さ一五・九センチ、厚さ四・九センチある。

第75図は、鶴岡地区の菖蒲谷より出土した古式土師器である。甕形土器は口縁端部が肥厚した布留式土器の特徴を有するものである。遺構については不明である。

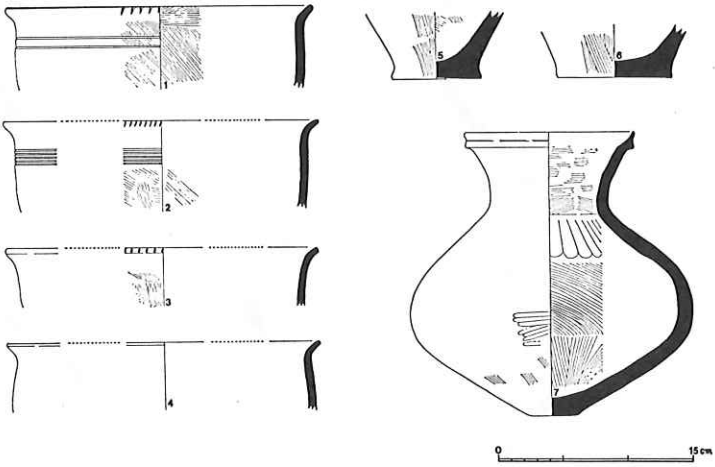
この他にも、山ノ宮遺跡からは打製の石包丁が出土しており、伊府遺跡からは弥生土器片が採集されている。



第74図　浅倉神社境内出土磨製石器



第75図　菖蒲谷遺跡出土土器

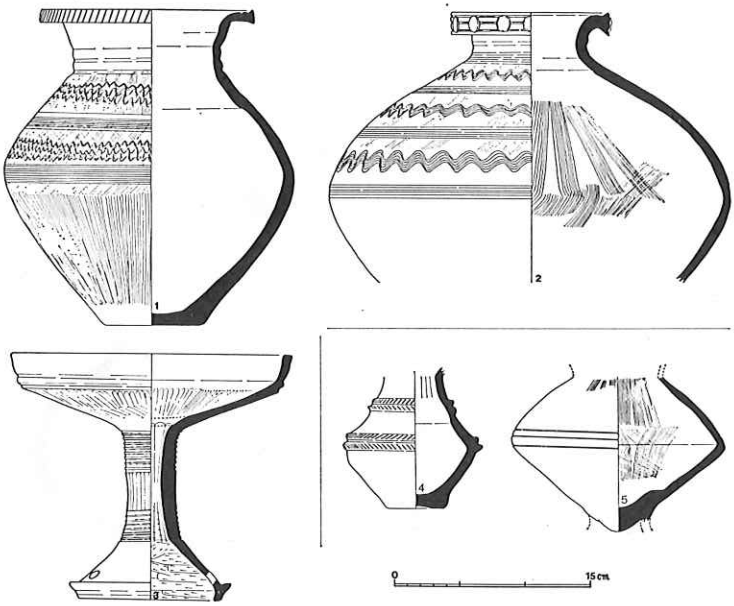


第76図　出石町出土の土器

第四節　但馬の弥生文化

「但馬」という言葉は、元来円山川水系流域の地域を指していう地名である。生野町円山を源とする円山川は、支流が一六本あり、合わせた総延長約六三八キロにおよぶ最大の河川である。円山川の上流は、源である生野で南流している市川の上流とあい会している。また、丹波石生の標高九五メートルの地点で、谷中分水によって加古川の支流である佐治川と、由良川の支流である竹田川が南と北に分かれて流れている。俗に言われている「磨製石剣の道」はこの河川を通じた道を指している。山のけわしい但馬においては、こうした各河川が文化を伝播する重要な役割を果している。豊岡市気比や日高町久田谷より出土した銅鐸もまたこのような河川を利用して、畿内からもたらされたものである。

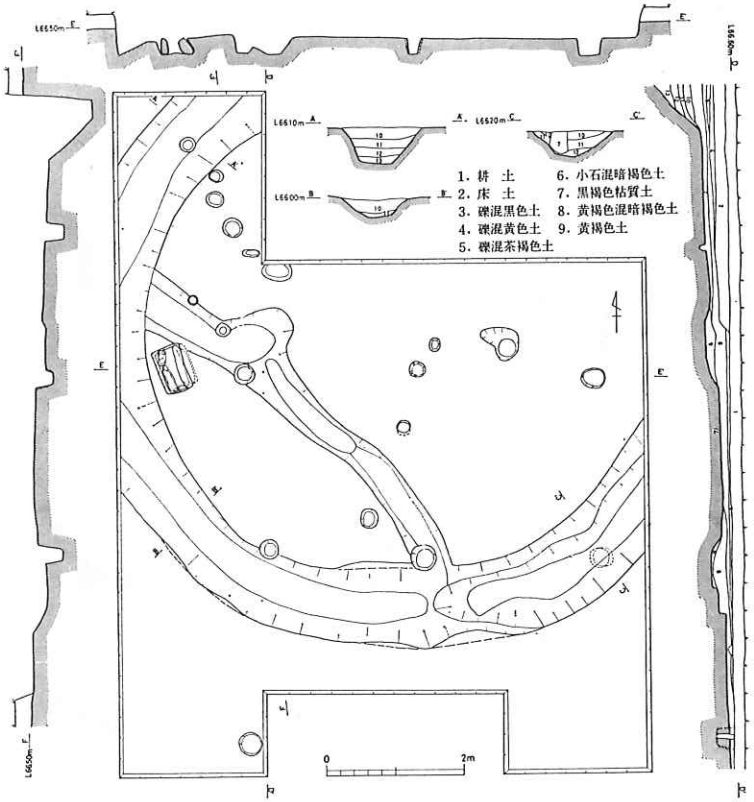
前期・中期



第77図　養父町・和田山町出土の土器

出石町の宮内黒田遺跡からは、前期後半から中期の土器が出土している（第76図1～6）。甕形土器は口唇部に刻目をもち、頸部下には篦描きの沈線をめぐらしているものもある。壺形土器も頸部に篦描きの沈線をめぐらしたり、刻目のついた突帯を胴部に貼りめぐらしている。他に石器類も出土している。

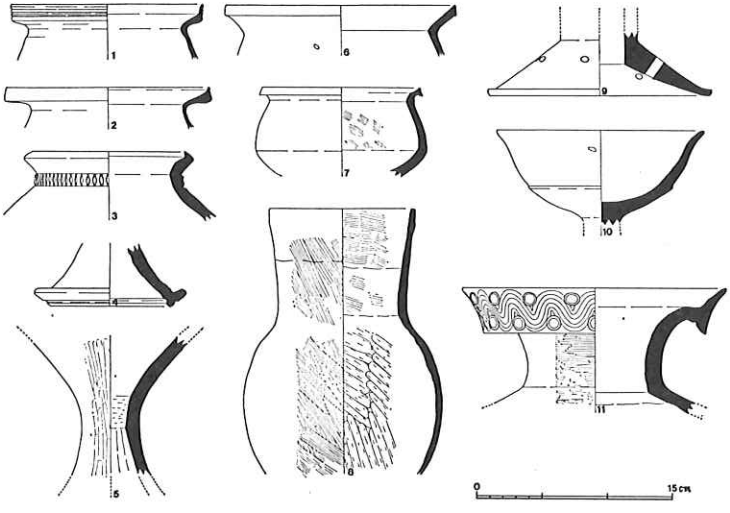
この宮内黒田遺跡より約一〇〇メートル北方にある出石神社付近からも土器・石器類が出土している。遺物は中期から後期にかけてのものが中心であるが、前期のものも若干含まれるため、かなり広範



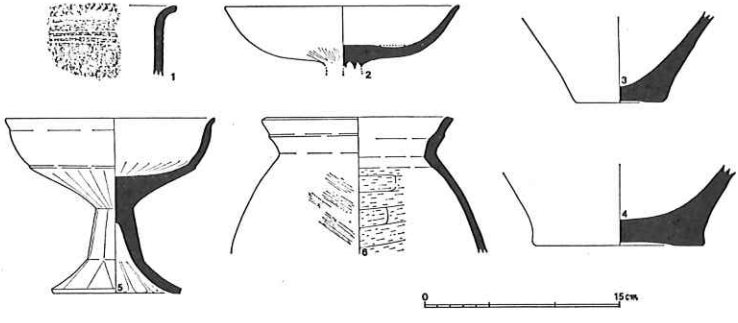
第78図　八鹿町米里遺跡円形周溝墓

囲の遺跡が存在したと思われる。住居址等は確認されていない。また、浜坂町においても前期の甕の破片が採集されている。

和田山町安井からは、ほ場整備工事中に、前期後半の壺形土器が採集されている（第77図右下4）。口縁部が欠けているが、残存高一〇・九センチの小形品である。胴部に刻目をつけた貼り付け突帯がみられる。また、同



第79図　豊岡市出土の土器



第80図　浜坂町出土の土器

町平野からは、脚部・口縁部の欠失した台付短頸壺が採集されている。胴中央部には三条の凹線がめぐる（第77図右下5）。中期末のものである。最近和田山町筒江で行なわれた発掘調査では、多量の前期の土器が出土している[29]。八鹿町においては、小山字東家ノ上A、A―一遺跡より前期後半から中期中葉のものが出土している[27]。報告によると遺物は石鏃・石包丁・砥石などの石器類と篦描き沈線、刻目のついた貼り付け突帯、櫛描き波状文などがみられる壺・甕の弥生土器片である。八鹿町米里では最近中期後半の円形周溝墓が検出され[28]、それに伴ない土器も出土している。養父町では、中期後半のササ遺跡が知られている（第77図1～3）。畿内色の強い土器である。2の壺の口端面、3の高坏の脚部には凹線がみられる[25]。

また、以前からよく知られているものに豊岡市気比の鷲崎から大正元年に石切り現場で出土した四個体の銅鐸がある[24]。一号鐸は総高約四五・五センチの横帯流水文銅鐸で鈕の隆起帯外に一部山椒魚と思われるものが表現されている。二号鐸は、総高四五・一センチの横帯流水文銅鐸である。三号鐸は総高四四・三センチの縦横帯流水文銅鐸で、鈕の隆起帯内外に鹿の群像や、体部に人物・亀が描かれている。四号鐸は総高四五・八センチの横帯流水文銅鐸で堺市陶器村出土のものと同範関係にある。このうち、三号鐸の鋳型が大阪府茨木市の東奈良遺跡より出土しており、畿内で製作された銅鐸が但馬にもたらされたことが実証されている。これらの銅鐸は銹の状態から土中に埋められていたものであることが指摘されており[31]、偶然掘り出されたものが再びおさめられたものであろう。四つの銅鐸が同一の場所に埋蔵されていたかどうかは、もはや不明であるが、おそらくは気比から距離的には隔りのない所に埋蔵されていたものと思われる。

このほか、中期の遺跡としては豊岡市女代神社遺跡が知られている（第79図3・4）。女代神社遺跡は、円山川と出石川が合流する付近に所在する九日市上ノ町女代神社付近一帯の遺物包蔵地である。遺物は弥生中期から

古墳時代前期にかけての土器を出土している。[32] おそらく、この遺跡は、河川の氾濫によって、弥生〜古墳前期にいたる生活基盤が削られて、運ばれ堆積したものと思われる。

後期

後期になると各地で遺跡が増加するが、川床に位置するものが多く、土器のみの出土で、集落址の検出はまれである。出石町では、鳥居橋付近から土器が出土している[33]（第76図7）。豊岡市では、女代神社遺跡（第79図1〜2・5〜7）、大磯遺跡、塩津遺跡、九日市遺跡（第79図8）、大篠岡遺跡（第79図10）などがあげられる。円山大橋下・堀川橋下などは円山川洪水敷の遺跡である。また、鎌谷川からも高坏の脚部が採集されている（第79図9）。八鹿町では大明神遺跡が知られている。

これらの遺跡からは、弥生土器に混じって古式土師器も出土している。おそらく、弥生時代後半から古墳時代にかけて、大きな変化をみることなく、営みが続けられたのであろう。

海岸沿いにおいては、食料供給源の多くを水稲耕作より、貝類や魚類の捕獲というような狩猟採集に重点をおいたと考えるのが妥当である。また、内陸部においても中期の土器を出土した養父町のササ遺跡のように、地形的に、水稲耕作が行なわれたとは考え難い遺跡があり、多くは河川に依存した魚貝類の捕獲や畑作で生活が営まれていたと思われる。そうしたなかで、出石地方は広大な沖積平野にめぐまれ、大きな農耕集団が形成されたと思われ、天日槍伝説[34]と関連して注目すべき地域である。しかしながら、出石地方が地理的に閉鎖された地域であるのに比べて、日高町は畿内地方、山陰地方、丹後地方との交通の要路にあたっており、弥生時代後半以降それぞれの文化を摂取していき、のちの国分寺設置にみられるように、但馬の文化の中心になっていった。

〔注〕

① 縄文時代においても一部で農耕が行われていたとする説（藤森栄一氏の縄文中期農耕説、賀川光夫氏の縄文晩期農耕説）がある。最近発掘された福岡県板付遺跡では、弥生最古（板付Ⅰ式）の水田址よりさらに一メートル下で縄文晩期（夜臼式）の水田址が発見された。（山崎純男「福岡市板付遺跡の縄文時代水田址」『月刊文化財』昭和五三年十月号）稲作農耕は弥生時代に突然現われたのではなく、北九州においてはすでに縄文晩期にその基礎が出来上っていたのは確実である。

② 蒔田鎗次郎「弥生式土器（貝塚土器に似て薄手のもの）発見に付て」『東京人類学雑誌』一一―一二二　明治二九年

③ 須藤求馬「有紋素焼土器考」『東京人類学雑誌』一二―一三九　明治三〇年

④ 大野雲外「埴瓮土器に就て」『東京人類学雑誌』一七―一九二　明治三五年

坪井正五郎氏が「西ヶ原貝塚探究報告」（『東京人類学雑誌』八―八五　明治二六年）ですでに用いた名称であるが、大野氏は弥生式土器が祭祀土器であるとの解釈よりこの名称を固執した。

⑤ 八木奘三郎「中間土器の貝塚調査報告」『東京人類学雑誌』二二―二四八・二五〇・二五一　明治三九年、四〇年

⑥ 山内清男「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』四〇―五　大正一四年

⑦『大和唐古弥生式遺跡の研究』　京都帝国大学文学部考古学研究報告第一六冊　昭和一八年

⑧『登呂』　日本考古学協会　昭和二四年

『登呂―本編―』　日本考古学協会　昭和二九年

⑨ 森本六爾『日本農耕文化の起源』　昭和一六年

⑩ 杉原荘介『遠賀川―筑前立屋敷遺跡』　昭和一八年

兵庫県明石市吉田遺跡の土器が福岡県立屋敷遺跡の土器と類似することに着眼し、小林行雄氏が「遠賀川式土器」と呼んだのが定着した。その後、大阪府高槻市安満遺跡の土器を検討するにおよんで、遠賀川式土器が西から東へ波及したことを立証した。（小林行雄「吉田土器及び遠賀川土器とその伝幡」『考古学』三―五、「安満類土器考」『考古学』三―四　昭和七

年

⑪ **板付Ⅰ式土器**　北部九州に集中して分布しているが、熊本県や鹿児島県にも一部認められる。甕は高さ三〇センチぐらいのものが多く平底で、胴はほとんど張らない。口縁はわずかに外湾して端部に刻目を施す。壺は円形貼付状の底を有して、肩部には箆描で複線山形文、羽状文を施す。

⑫ **夜臼式土器**　昭和二六年、福岡県粕屋郡新宮町夜臼遺跡で検出された縄文終末期の土器。器面は研磨されていることが多く、甕の底部は厚い平底で、口縁は「く」の字状に屈曲して、口縁端部に刻目を施したり、刻目突帯を有する。壺は平底のものが多くなり、弥生土器と非常に類似している。

⑬ **板付Ⅱ式土器**　甕の口縁端部に刻目を施し、口縁下部には箆描沈線をめぐらしたりしているが、後半になると貼付突帯をめぐらしたりする。壺は肩が張って胴部の最大径が中から上の方になり、器面には箆描文や貝殻腹縁による羽状文、重弧文が施されている。

⑭ **須玖式土器**　福岡県春日市大字須玖字岡本所在の須玖（岡本）遺跡から出土する甕棺を森本六爾氏が、中期の土器様式として〝須玖式〟の名称を与えた。須玖遺跡出土の甕棺からは、前漢鏡や銅剣・銅矛・銅戈などの青銅器、管玉、璧・勾玉などのガラス製品が出土し、弥生文化の編年研究の資料として重要な位置を占める。須玖式土器は細かくは須玖Ⅰ式、須玖Ⅱ式に分かれる。甕・壺・高坏などの口縁が平坦な鋤形になっているのが特色である。

⑮ **土師器**　「延喜式」にみえる名称であるが古墳時代にも同様に呼ばれていたかどうかは文献がないため不明である。このため、正確には「土師式土器」と呼ぶ方がふさわしいのであるが、慣用語として定着してしまっている。

⑯ **布留式土器**　奈良県天理市所在の布留遺跡より出土した小形丸底壺を含む土器群を総称していう。

⑰ **庄内式土器**　大阪府豊中市庄内町より弥生前期から後期の土器、布留式土器などが混在して出土している中で、弥生第五様式や布留式にも属さない土器群を田中琢氏が抽出して「庄内式土器」と呼ぶことを提唱した。

⑱ 青木良信、桑原公徳、山田安彦、西田彦一「兵庫県城崎郡日高町祢布ヶ森遺跡発掘概要」『史想』八号　昭和三三年

⑲ 火鑽臼（ひきりうす）　火を興こすための発火具。

⑳ 兵庫県城崎郡日高町教育委員会『但馬・祢布ヶ森西遺跡調査報告書』　昭和五一年

㉑ 昭和五四年三月に瀬戸谷晧、茨木信雄、瀬尾恵理子の三氏で採集されたもので、壺形土器一八点、甕形土器九点、高坏形土器九点、器台形土器三点、脚部片六点、底部片二点を実測図にあげて紹介されており、他に縄文土器一点を採集されたことを報告されている。河内からの搬入品と考えられるのは、口縁端部の下部が垂下している壺形土器の口縁片二点で、胎土がチョコレート色をした砂質のもので、二点とも端面に凸線文を施し、円形浮文を貼りつけている。　瀬戸谷晧「城崎郡日高町南八代田遺跡採集の弥生土器」『兵庫考古』第七号　昭和五四年

㉒ 遺物はこのほかに、古式土師器、土錘、木材片、堅果類などを採集されている。　前田豊邦「兵庫県城崎郡日高町水上遺跡」『古代学研究』　昭和四一年

㉓ 多淵敏樹・松本正信の二氏によって発掘調査が行なわれ、その時にも多量の古式土師器と木製品が出土している。

㉔ 佐原真「銅鐸の鋳造」『世界考古学大系2』平凡社　一九六〇年久田谷遺跡出土の銅鐸発見者は田武忠夫氏である。

㉕ 浜坂町旧大庭中学所蔵。（第80図1）

㉖ 昭和五四年兵庫県教育委員会が調査し、現在整理中である。

㉗ 八鹿古代史研究会『八鹿の古代を探る』　昭和五三年

㉘ 八鹿町教育委員会『但馬・米里遺跡』　昭和四年

㉙ これらの土器については、瀬戸谷晧氏が詳細に報告されている。瀬戸谷晧「養父町餅耕地出土の弥生式土器」『養父郡の埋蔵文化財』　昭和四九年

㉚ 今西龍「但馬国城崎郡気比の銅鐸発見地」『考古学雑誌』第四巻第三号　大正二年

㉛ 三木文雄『流水文銅鐸の研究』　昭和四九年

㉜ 瀬戸谷晧・中村典男「女代神社遺跡発掘調査概報」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第二集　昭和四七年

㉝ 浜坂町在住の山本茂信氏が保管されている。このほかにも、第79図6・7・9～11、第80図2・5・6も同氏所蔵のもので、実測の便宜をはかっていただいた。記して感謝したい。

㉞ 今井啓一『天日槍』昭和四二年